アカデミーパレード

雷那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アカデミーパレード

【Ｎコード】
Ｎ５７３５Ｌ

【作者名】
雷那

【あらすじ】
私立桜川学園
この学園には様々な生徒達がいた。そしてそこには記憶をなくした少年がひとりいた。
この物語はその少年を中心に回っていく学園生活物語である。
どうも雷那です。この小説は一応学園＋恋愛のつもりです。基本毎

日少しずつ書いていきますが、もしかしたら不定期更新になるかもしれませんのでそこのところよろしくお願いします。

3月19日に「アカデミーパレード～キャラクター紹介～」を書きました。
そちらの方も暇な方は読んでみてください

入学式

「もう朝か・・・」
そう言いながら俺は布団から起き上がった。

あ、俺は朝倉空(あさくらそら)。今日から桜川学園の1年になる普通の少年かな。
まぁ変わっているところと言えば6歳以降の記憶をがないってことかな。
俺もなんで記憶をなくしているかは分からないけど今は記憶を失っているから困ることがあるというわけじゃないから別に気にしてないんだけどね。

「空くーーんッ!!起きた?」
大声を出しながらドアを開けた人物は朝倉瑞穂(あさくらみずほ)。俺の姉さんだ。
まぁ姉さんと言っても義理の姉なんだけど、記憶がなく家がなかった俺をおじさんにこの家に住まわせてもらっていて今じゃ家族みたいなものだから姉さんと呼んでいる。

「あぁ姉さん、今起きたよ。」

「早くしないと遅刻するわよ！今日は空君の入学式なんだからね。」

「あぁ、分かってるよ姉さん。」

「まったくもぅ・・・空君はいつも起きるの遅いんだから。」

そう言い姉さんはわざとらしくほっぺをふくらました。

「ほんと、昔から空くんは変わらないよね。いつもいつも朝はお姉ちゃんに起こしてもらわないといけないし」

「あ、あの姉さん。」

「空君はだめだめだよねぇ。やっぱりお姉ちゃんが絶対必要だよね。」

「ね、姉さんちょっと」

「全くしょうがないんだから空君は～。まぁ空君のためだからお姉ちゃんはいいんだけどね☆」

「姉さん！」
大声で姉さんに呼び掛けると姉さんはやっと気づいてくれた。
「え、なに空君。急に大声だしたりして。」

「あのさ、着替えるから部屋から出ていってくれないかなぁ。。」

「あ、ごめん空君！！」
姉さんは慌てたようにやっと部屋から出ていってくれた。

「空君鍵かけた？」

「うん、じゃあ行こうか姉さん。」

私立桜川学園までは家から歩いて２０分ぐらいのところにある。俺と姉さんは中学の頃から毎日歩いて学園に通っている。ちなみに桜川は中高一貫性の学校だ。

「いや～、今日から空君も学園の高校生か～。」

「といってもあまり実感ないんだよね。ただ高等部にいくだけだし。」

「それでもお姉ちゃんは嬉しいよ。空君と教室近くなるんだしね～♪」

「別に学校で会わなくてもいつも家で会ってるしいいんじゃないかな・・・。」

「う～空君のいじわる～」
そう言い姉さんは泣くふりをし始めた。

「おーい、そらーー！！」
突然俺達の後ろからかん高い大きな声が聞こえてきた。

「はぁ・・・はぁ・・・、やっと追い付いたよ～」

「おぉ、渚おはよう。」

「うん、おはよう。瑞穂先輩もおはようございます。」

「おはよう、渚ちゃん。」

今俺の目の前で息をきらしている女の子は神沢渚(かんざわなぎさ)俺の幼なじみだ。なぜか小学生の頃からずっとクラスが一緒なんだよな。

「それより、渚また寝坊してきたのか？」

「今日は私のせいじゃないよぅ。時計が勝手に壊れてて朝時計が鳴らなかったんだよ。。」

「はいはい、言い訳はいいから。」

「言い訳なんかじゃないよ、ほんとだよぅ～。」

「空君、渚ちゃんこんなところで立ち話してると、遅刻するよ。早く行くよ。」

「あぁ、そうだね。」

そう言い俺は渚の言い訳をスルーしまた歩き始めた。

「ちょっと、空！！言い訳じゃないんだからねぇ。」

～私立桜川学園～

「入学式の前にクラス表見ないとな。」

「あ、そうだったね！じゃあ空、先輩早速見に行こうよ。」

「そうね～じゃあ行こっか。」

俺達3人はクラス表を見に行った。

「えっと、朝倉・・・朝倉っと・・・・・・あ、あった！1ーBかぁ。」

俺はあ行からの名字だったから名前はすぐに見つかった。

「やったぁ私も1ーBだよ！空！！」

俺の横で渚ははしゃいでいた。

「また、お前と一緒のクラスかよ。」

「何よぉ、なんか不満なのぉ～。」

「べっつにー。」

「空君と渚ちゃんまたふたりとも一緒のクラスなんだ。。羨ましいなぁ。」

「しょうがないだろ姉さんはひとつ年上なんだし。」「む～、空くんのいじわるっ。」

「そう言われても・・・。ま、まぁこんな所で話してるのもなんだしはやく入学式行こうよ。」

「そうだね、じゃあ体育館へ行こう。」

「あ、私教室だから。じゃあね空くん、渚ちゃん。放課後ね。」

そう言い姉さんは急いで校舎の中へ入っていった。姉さんと別れた後俺と渚は体育館へと移動した。

～体育館～

「うわ～結構人いるな。」

俺たちが体育館に来たときにはすでにかなりの人が体育館にいた。

「えっと、１－Ｂだからここね。空、出席番号順に座るらしいよ。」

「わかった。じゃあまた後でな渚。」

同じ１－Ｂでも出席番号が違うので俺と渚はそれぞれの座るとこへと向かった。

「出席番号１番だしやっぱり１番前だよな・・・。」

呟きながら俺は一番前の席へと座った。

「入学式長くなりそうだし寝ようかな・・・。」

「ねぇ。」

「ん・・・？」
もう寝ようと思ったら隣の席の人に呼ばれた。
そこにはそこそこ髪が長く、茶色に染まってるような髪で小さめな女の子がいた。

「あなた、面白そうね。」

「面白そう？一体なにが・・・。ていうか君誰だよ。」

「フフ、そのままの意味よ・・・。私は水無月彩音よ。よろしくね、朝倉空君。」

「よろしくって、何で俺の名前知ってんだよ！？」

「さぁてなんででしょうねぇ。」

「まぁ、別にいいけど。」

「フフ、ほんと思ってた通りだわ。」

「なんか言ったか？」

「なんでもないわよ。」

「はぁ・・・。あ、そろそろ式が始まるな。」

そう言い俺は前を向いた。

そして式が始まり校長の長話が３０分越すんじゃないかという辺りで事件は起きた・・・。

「そろそろね。」

横で水無月がぼそっと呟いた。

「朝倉、あんた今から良いもの見れるよ。」

「良いもの？何言ってるんだ、お前？」

「まぁ、見てなさいって」

「３・・・２・・・１」

急に水無月はカウントダウンしはじめた。

「今よ！！」

ガタガタガタ

水無月の合図が出た後俺は校長の頭上から音がしているのに気付き見てみた。

すると勢いよくくす玉がでてき、校長の頭に落ちてきていた。まわりはクスクスと笑いが起き、俺はくす玉からでてきた文字を読んでみた。

「えっと・・・入学おめでとう、そして大成功！ｂｙ新入生朝倉＆ａｍｐ；水無月・・・・・っておい！なんで名前書いてんだよ、しかもなんで俺まで！！」

「えー、朝倉君と水無月さん至急前にでてきなさい！！」

「おい、水無月これなんだよ！？ってあれ？」

横を見てみるとついさっき俺の隣にいたはずの水無月の姿が跡形も

なく消えていた。

「やばッ！逃げないと！」

先生が俺のところに来ているのに気付き俺は全速力で体育館から出ていった。

「こら！待ちなさい朝倉君！！」

だが数人の先生達に追いかけられ結局は捕まってしまいなぜか罪のない俺が校長室に呼ばれ、怒られてしまった。

「くっそー、なんで俺が怒られなきゃいけないんだよ・・・。。」

こってりしぼられた後俺はぶつぶつと呟きながひとり廊下を歩いていた。「ちょっと、空！どういうことなの！？」

俺のもとに入学式から帰ってきた渚が走ってきた。

「どういうことって言っても俺は関係なくて、ただまき込まれただけだし・・・しかもそれは水無月のせいだし。」

渚に入学式の途中であったことを必死で伝えたつもりなのだが・・・あきらかに納得いってない顔だった。

「おふたりさん、廊下で言い争いはどうかと思うわよ。」

渚と言い争っていると横から声が聞こえた。

「おまえ、水無月！今まで一体どこにいたんだよ！？お前のせいで俺はえらいめにあったんだからな！！」

「フフ、少し声の音抑えなさい。それに朝倉あんただけのせいじゃないからいいじゃない。しかも面白かったんだから。」

「確かに、あれは皆ウケてたけど・・・、でもなんで俺までまき込まれなくちゃならないんだよ！」

「それは、朝倉あんたはあたしに選ばれたからよ。」

「は？選ばれた？？」

「フフ、この話はもう終わりよ。早く教室に入りましょう・・・・。」

そう言い水無月は足早に教室へと入っていった。

「お、おいちょっと待てよ、水無月！」

俺と渚が教室に入ると教室にいる人の視線が一気に俺の方へと向かった。

さすがにあれだけの事をすれば注目される・・・・・・

「って、あれは俺関係ないじゃん！ただ名前水無月に書かれてただけだし、全部水無月のせいじゃん。」

「ま、まぁ空落ち着いて。それにそろそろ先生来るよ。」

渚に促されさっさと席に着いた。

「よぅ！えっと朝倉空だったっけ？」

席に座ると後ろの席の男子に話かけられた。

「そうだけど、君は？」

「俺は、榎本相馬（えのもとそうま）よろしくな。」

「うん、よろしく。」

「それにしても、お前なかなかやるな、入学式早々問題起こすなんて。」

「いや、だからあれは水無月が・・・。ていうか俺一切関係ないし・・・。」

「まぁまぁ、いいじゃん。学校中にお前と水無月さんの名前知れわたったことだし。」

「それはいいことなのか・・・・・・？」

明らかに相馬は面白がってた。。そしてわいわいと相馬と喋っていると教室の扉が開き先生と思われる女の人が入ってきて教壇に立った。

「え～、皆さん初めまして。そしてご入学おめでとう！このクラスの担任となった常磐静香（ときわしずか）だ。よろしく頼む。」

一通り常磐先生の話が終わると急に俺の方と水無月がいる方に目を向けた。

「早速入学式に問題を起こした奴がいるみたいだけど、皆はこんなこと絶対にしないように！ね、朝倉！水無月！」

「フフ…」

「やばい、明らかに俺達目つけられてるじゃないか・・・。しかも今は笑うところじゃないだろ水無月…」

「んじゃまぁ話はこんなところで今日は終わりね。でわ、明日からがんばりましょう。」

そう言って先生は教室から出ていった。

「ふあ～、やっと終わったぁ。」

「朝倉」

「うわぁッ！びっくりした、水無月かよ。。急に後ろから話かけてくるなよな」

「フフ、いいじゃない、そういう仲なんだから。それより今から時間ある？」

「なッッ！お前達もうそういう仲だったのか！？」

横から相馬が身を乗り出して驚いたように聞いてきた

「なわけないだろ！！水無月も変なこと言うなよな！それより、時間あるってどうせまた馬鹿みたいことするつもりだろ。。」

「馬鹿みたいなこととは失礼ね・・・。これからの高校生活どういう風に面白くするか一緒に考えようとしたんだけど。」

「いや、お前ひとりで考えてくれ・・・。お前絶対にろくでもないこと考えてるだろうし。」

「フフ、照れちゃって。」

「お～い空ぁ、帰る準備できた？瑞穂先輩たぶんもう待ってると思

うけど。」

急いでるように渚は俺のところに駆けつけてきた。

「あぁ、ごめん忘れてた。ちょっと待ってて。」

「おい、朝倉お前この美少女は誰だ！？」

「美少女って・・・こいつは神沢渚で俺の幼なじみだよ。」

「渚です、よろしくお願いしますね。え～と2人の名前は・・・」

「榎本相馬です！！よろしく！」

「今さっき確か会ったわよね？私は水無月彩音よろしく。」

「うん、榎本君、彩音ちゃんよろしくね。それより、空早く行かないと。」

「あぁ、帰る支度はできたし行こうか。んじゃあまた明日な榎本、水無月。」

「明日を楽しみにしてるわよ、朝倉。」

「じゃーな朝倉と渚ちゃん。」

2人と別れて俺と渚は急いで姉さんと待ち合わせをしている校門へと走っていった。

「あぁ、やっと来たぁ！」

「姉さん、ごめん遅れた！！」

「すいません先輩遅くなって・・・。」

「全くもぅ・・・、何してたの？お姉ちゃんずっと空君と渚ちゃん待ってたのに。。」

「ごめん、ちょっとクラスの人と話こんじゃっててそれで遅れたん

だよ。」

「クラスの人って、空君もう友達できたの！？」

「そうなんですよ、先輩。空もう友達作ってるんですよ。しかも2人、ほんと空って凄いよね～。まぁおかげで私も友達になれたんだけどね。」

「へぇ～、空君凄いねぇ」

「友達って、榎本はまだいいけど水無月は違うような・・・。まぁ、そんなことより早く帰ろうよ。なんか今日色々あって疲れちゃったし。。」

「そうだね。じゃあ帰ろうか。」

校門を出て俺達は家の方への道へと歩いていった。

「あ！そうだ空君、生徒会長から聞いたんだけど今日入学式の途中

問題起こしたらしいね。一体何したの！？」

「またそれか・・・。。だから俺は何もしてないって。ただ水無月が勝手にやっただけで巻き添えくらっただけなんだよ。」

「本当に？嘘じゃないよねぇ？」

「本当だよ！！」

「ま、まぁ先輩空を許してあげてください。たぶん空が嘘言ってるかんじ全然ないし・・・。」

「そうだね。空君は嘘つかないよね。信じるよ。でも生徒会長に目つけられてるから気をつけてね。」

「そんな・・・なんで目つけられないといけないんだよ・・・。。」

「ま、まぁ空頑張って。」

わいわいと喋っている内にいつの間にか家の前まで着いていた。

「じゃあ私はこっちだから。また明日空、先輩。」

「うん、また明日ね。渚ちゃん。」

「じゃあな渚。」

渚と別れて俺と姉さんは家へと入っていった。

「はぁ～、やっと帰ってこれたよ。疲れたし晩飯まで寝ようかな。」

「え、空君お昼御飯は食べないの？」

俺は姉さんの言葉を聞いてふと時計を見てみた。

「あ、まだ1時なんだ。なんかもう3時ぐらいと思ってたんだけどな・・・。まぁ昼飯はいいや。なんか凄く疲れたし。」

「うん、わかったよ。じゃあ晩御飯の時になったら起こすね。」

「ありがとう姉さん。じゃあおやすみ。」

そしてリビングから自分の部屋へと戻り早々と俺は寝ることにした。

寝る時俺は今日の事を振り返ってみることにした。

今日は高校の入学式、また今年も渚と同じクラス。そして早速水無月と問題起こして・・・・・って、あれは俺のせいじゃないし。。

その後は校長に怒られたな。やっぱり俺だけっておかしいだろ・・・。

それから１－Ｂの教室行って相馬と友達になったな。まさか入学早々友達できるとは思わなかったな。

「まぁ、だいたいこんなところかな。あ、そういえば俺が生徒会長に目つけられたとか姉さん言ってたな・・・。生徒会長ってどんな人なんだろう。。」

生徒会長がどんな人か考えているうちにどんどん眠くなってきた。

「はぁ、今日はほんと色々なことがあったな。。寝るか・・・。」

そうして俺は眠りへとついた

生徒会

～次の日～

「あぁ～、よく寝た・・・。。結局昨日は飯も食べずにずっと寝てたな。。我ながら凄いと思うな。さてと、着替えて下に降りるか。」

俺はさっさと着替え下に降りていった。

「おはよう、姉さん。」

「おはよう、空君。そういえば昨日晩御飯の時起こしに行ってあげたのに、起きなかったね。。おかげでお姉ちゃんひとりで寂しくご飯食べてたんだよ～・・・」

「ご、ごめん姉さん。今度からは気をつけるから。」

「ほんと気をつけてよねぇ。まぁとりあえず朝御飯食べよ。早くしないと学校遅れるよ。」

「うん。じゃあいただきます。」

姉さんと朝御飯を食べ俺と姉さんは準備をし外へと出ていった。

「おはよ。」

「・・・・・・!!なんでお前がここにいるんだよ!?」

外に出ると何故か水無月がいた。

「フフ、びっくりした?」

「当たり前だろ!なんで俺の家知ってんだよ!?」

「さぁてなんででしょう?当ててみなさい。」

「・・・・・もぅいいよ。お前相手にしてたらなんか疲れるし。」

「そう。なんかつまんないわね。」

「まぁまぁ空君せっかく水無月さんが来てくれたんだし一緒に行きましょ。」

「はぁ。。そうだね、じゃあ行こうか姉さん、水無月」

そして俺達は学園の方へと向かって行った。
だがやっぱり俺は水無月がどうして俺の家を知っているのかが気になっていた。

なにものだよあいつは・・・後先おもいやられそうだなどと思いながら登校するのであった。。

「それじゃ姉さん、また昼休みに。」

「うん、空君。またお昼休みにね。水無月さん、空君の事お願いね。」

「はい、まかせてください先輩。私が空をちゃんと調教しますから・・・。」

「おい！なに言ってるんだよ水無月！姉さんも、こんな奴に頼まなくていいから。それより水無月早く教室行くぞ！」

「フフ、照れ屋さんねぇ。」

姉さんと別れて俺と水無月は教室へと向かった。

「おぉ、朝倉おはよう」

「おはよう、榎本。お前って学園来るの早いんだな。」

「はは、俺は優等生だからな。」

「それは、自分で言うことじゃないと思うけどな・・・・・。」

「そうだ、朝倉お前また水無月と一緒だったけどやっぱりお前達って・・・・・」

「ああ!!もう、勘違いするなよ。昨日言ったようにあいつとはなんもないからな!」

「わかったわかった。それより渚ちゃんは、一緒に来なかったのか？」

「あぁ、渚はたぶん寝坊だよ。あいつ朝弱いからな。」

「なんだそうか。あぁ、早く神沢さん来ないかな。」

「なんで、渚が来ること楽しみにしてるんだ？」

「渚ちゃんと仲が良い幸せ者には教えん！」

「なんだよそれ・・・。」

チャイムが鳴り終わるギリギリで渚が到着してなんとか間に合った。そして先生も教室に入ってきて朝のホームが始まった

「え～みんなおはよう。今日の予定はとりあえず対面式があるな。そんでその後は教室でロングホームだな。自己紹介とかしてもらうから覚悟しとけよ。そんじゃ朝のホーム終わり！」

「あぁ今日はだるそうだな。」

「ほんとだるそうだね、空。でもがんばらないとね。」

「遅刻しかけたやつにがんばれと言われてもな～。。」

「ち、違うの！今日は時計が勝手に止まってただけで私が悪いわけじゃないんだよ！」

「なんかその言い訳いつも聞いてるように気がするんだけど・・。」

「言い訳なんかじゃないって～信じてよ空！」

「はいはい、信じてやるから落ち着けって。」

俺は明らかに焦っている渚をなだめてやった。それより、こいつは本当に昔から変わらないなぁ。嘘言うと明らかに顔に出てくるし。

「お～い渚ちゃんに朝倉早く体育館に行くぞ。」

榎本と水無月が体育館に行こうとしていた。

「わかった。ほら、渚行くぞ。」

「あ、ちょっと待ってよ空！」

そして俺達は体育館へと向かっていった。

廊下を急いで走っている途中俺達はある人と出会った。

「こら！君達廊下は走っちゃだめだよ！」

「あ、すいません・・・・って誰？」
そこには、少し髪が長めので少し気の強めな感じの女の子がいた。

「わたし？わたしは生徒会副会長の橘茜（たちばなあかね）。それより廊下は歩かないと・・・。走ってたら危ないわよ。」

「いや、だって急がないと式に間に合わないし・・・」

「言い訳しない！全くこれだから新入生は・・・・・。ん？あなたどこかで見た顔ね。そっちの女の子も・・・。」
そう言い橘先輩は俺と水無月の顔を交互に見始めた。

「あ！あなた達ふたり、朝倉空と水無月彩音でしょ！？」

「え、なんで俺達の名前知ってるんですか？」

「知ってるも何も昨日あんだけ騒ぎ起こしたら知らないはずないでしょ！ということであなた達ちょっと来なさい。私達があなたを更生してあげる！」

「そんな、対面式今からあるし、それはまた今度ってことで・・・」

「だめ！逃がさないわよ。」
そう言いながら橘先輩はじりじりと俺と水無月に近づいてきた。

「や、やばいこの人本気だ・・・」

「朝倉。」
後ずさっていると水無月が小声で俺を呼んだ。

「いい、ここは全速力で突っ走るわよ。私達はこんなところで捕まるわけにはいかないの」

「俺はなにもやってないはずなんだけどな・・・。まぁここで捕まるのもめんどうだし。それじゃあ1、2、3で行くぞ。」

「ええ。それじゃあ・・・1・・・2・・・」

「3！！」

俺達は合図で全速力で体育館まで突っ走っていった。

「あ、こら待ちなさいふたりとも！！」

「空～おいてかないでよ～。。」

「渚ちゃん待って～俺様も行くぜー！」

「ふぅ～なんとか逃げきれたな」
俺たちはなんとか体育館に着き５０音準で整列をした。

「マジで危なかったな朝倉。お前絶対またあの先輩に追いかけられるぜ」

「はぁ～ほんと嫌になってくるよ。しかもあの人で副会長ってことは生徒会長はもっと凄い人なのかもしれないな・・・。なんで俺がこんな目に。」

「俺はうらやましいぜ朝倉よ。あんな美人な人に追いかけられるなんて。あぁ俺も追いかけられたいぜ。」

「ほんと、お前とかわりたいよ・・・」

榎本と会話をしているといつの間にか対面式が始まろうとしていた。

「ん、あれって今さっきの橘先輩だ。・・・っておもいっきりこっち睨んでるし。」

明らかに橘先輩の視線は俺に向けられていた。

「え～それでは対面式の言葉。生徒会長から1年生へ歓迎のお言葉です。」

進行役の人が下がっていよいよ生徒会長の出番。俺はこの時正直かなり緊張していた。生徒会長がどんな人かに。だが生徒会長が出てきた途端俺はある意味でビックリした。

「嘘だろ。あの人が生徒会長なのか！？」

「1年生の皆さんご入学おめでとうございます。」

生徒会長とは小学生の低学年とも思わせてくれる身長の女の子だったのだ。

「私は生徒会長としてこの学校を少しでもよりよくし、みんなが過ごしやすい桜川学園にしていきたいと思います。努力をしていきたいと思いますのでこの一年間よろしくお願いします」

「へぇ～生徒会長って結構いいこと言うな。ちっちゃいけど・・」

「フフ。なかなか腕のたちそうな生徒会長ね」

「水無月いつの間に後ろに・・・。まあいいや、それよりあんな子供みたいな人が手強そうなのか」

「私にはわかるのよ。」

この後1年生代表の挨拶やら校長先生の長話が続いていった。

「以上で対面式を終わりたいと思う。では、生徒の諸君は解散！」

こうして対面式は終了した

「はぁ～やっと終わったな。」

「お疲れ、空」

「あぁ渚もお疲れ様。ん？あれ、水無月は？」

「水無月なら今さっき終わった途端走って帰っていったぞ。」

「そうなんだ。なんかほんとに謎な奴だな。じゃあ榎本、渚、教室に戻ろうか」

俺たちが体育館から出ようとした時聞き覚えのある声が後ろから聞こえてきた。

「朝倉君見つけた！！」

「うわ、あれは橘先輩！？やばい、逃げないと。」

そう言い俺は一気に体育館から出ていった。

「あ、こら待ちなさい！」

「ふぅ～疲れた。。」

「ほんとまだ2日目なのに災難だね、空。」

「それを言うなよ渚。俺だって好きでこんなことしてるんじゃないんだから・・・」

なんとか俺は生徒会を振り切って教室まで戻ってこれた。だけど急に途中で追いかけてこなくなっていたことに俺は疑問をもっていた

「何もないといいんだけどな・・・」

「だから言ったでしょ朝倉。生徒会をなめてかかったらいけないのよ」

「くっ・・・覚えとくよ」

ピーンポーンパーンポーン

「ん？放送か。」

「一年、朝倉空君、至急視聴覚室へと来てください」

「へっ！？なんで俺が」

「空ぁまたなんかやらかしたんの？」

「いや、別になにもしてないし。」

「じゃあなんで、朝倉が呼びだされるんだ？」

「さぁ？まぁとりあえず視聴覚室に行ってみるよ。至急って言ってたから急ぎの用かもしれないし。」

「朝倉、もう一度言うけど生徒会にだけは気をつけなさい。私と朝倉の最高の計画がだいなしになってしまうからね。」

「計画って・・・。んじゃ行ってくるよ。」

そう言い俺は視聴覚室へと向かっていった。

「やはりなにか怪しいわね・・・。」

「ここが視聴覚室か。よし、入るか。」

空はドアを開けた。

「あれ、電気ついてないや、おかしいな。」
視聴覚室内は電気がついていなかった。
「場所間違えたかなぁ・・・・・っ！！！眩しっ」
突如視聴覚室内に電気がついた。

「引っ掛かったわね。朝倉空君！」
「そ、その声は・・・橘先輩・・・。」
「その通り！やっと捕まえたよ。さぁしっかりと昨日の事について反省してもらいましょうか。」

「くっ・・・。なんとかしないと。」
俺は急いで逃げようとした。しかし・・・。
「うわ！いつの間に！」
後ろには生徒会の者達が１０人ほどいた。
「さぁ諦めて、私達からの罰を受けなさ～い。」
「・・・・・・罰ってなにをしたらいいんですか？」
「お！やっと罰を受ける気になったわね。」

「この状況じゃなにもできないし、しょうがないですもの。」

「そうね。それじゃあ罰の内容をこのお方から言ってもらいましょう。」

「このお方？」

「やっと私の出番ですね」
そこに一人の少女が現れた
「君は！？」

「初めまして、朝倉くん」
「え、えっと確か・・・」

「生徒会長、水垣菜穂（みずがきなほ）です。菜穂と呼んでかまいませんので」

「はぁ。じゃあ菜穂先輩、罰というのは一体なにをしたらいいんでしょうか？」

「それはですねぇ～。私達生徒会に忠誠を誓って、今日から生徒会の一員になってもらうことです」

「嫌です！」

俺はきっぱりと断った

「駄目だよ、朝倉君。生徒会長のいうことは聞かないと。それも罰なんだしさ」

「いや、なにが生徒会長だよ。どっからどうみても普通の低学年の小学生じゃないかって・・・あ！！」

俺は言ってはいけないことを言ってしまったことに気づいた。

「わ、私が低学年の小学生・・、気にしてるのに気にしてるのに・・・」

菜穂先輩からは俺から見てもわかるようにすごいオーラが発生していた

「こら！朝倉君、早く生徒会長に謝りなさい！」

「わわ、すいません菜穂先輩！言うつもりはなかったんです。本当にすいません」

菜穂先輩は俯いたままだった。

「本当にすいません！なんでもしますから・・って菜穂先輩？・・・な、泣いてる！？」

「菜穂先輩、本当にすいません！なんでもしますから、泣かないでくださいっ！」

だけど菜穂先輩は泣きやまなかった・・・。

「朝倉君、どうするのよ～？生徒会長泣かして」

「口が滑っちゃったんですよ。だけど小学生って言われても別に気にすることじゃあないんじゃないですか、菜穂先輩かわいいし」

気のせいか突如その場の空気が静まり菜穂も泣きやんだ。

「あ、朝倉君・・・もしかして君ロリコン？」

「ち、違いますよ！ただまだ幼さが残っててかわいいというかなんというか」

「・・朝倉くん、私かわいいですか？」

「え・・・えと、まぁかわいいと思いますよ。」

菜穂先輩はボーッと俺の顔をみつめていた。

「あ、あの菜穂先輩？」

「男の人からかわいいって言ってもらったの初めてです。いつもチ

ビって言われてたから・・・・。」

「そ、そうなんですか。」

「だから・・・・。」

「だから?」

「朝倉くん気にいっちゃったんでますます生徒会に入れたくなっちゃいました。こうなったらなんとしてでも生徒会に入ってもらいます。」

「嘘だろ!?」

「さぁ、朝倉くん私と生徒会生活を満喫しましょう」

俺はじりじりと後ろへと下がっていったがついに生徒会連中に囲まれてしまった

「や、やばい。」

「朝倉くんがいけないんですよぉ。私の気持ちを本気にさしちゃったから。」

「ほ、本気って・・・くそ、誰か助けてくれぇぇ!」

空は叫んだ。すると・・・

「ピンチのようね、朝倉」

突如何処かからか声がした

「誰ですか！！姿を見せなさい！」

「フフ、そんなに私の姿が見たいなら見せてあげるわ・・・

飛び降りて来たその人物はやっぱりアイツだった

「お前・・・水無月！？」

「フフ、やはり生徒会の仕業だったわね。朝倉の後をついてきて正解だったわ。」

「ついてきたって、どうやってここに入ってきたんだよ？鍵おもいっきりかかってるのに。」

「企業秘密よ」

「あ、あなたは水無月さんね！？だけどあなたは生徒会に入らなくていいわよ。違う罰さえ受ければね。」

「あいにくだが断るわ。さぁ朝倉帰るわよ」

「どうやってだよ！？」

「フフ、こうするのよ！！」

バシュゥッ！！

水無月が投げた玉が音をたてて、煙を発した。

「なっ！煙玉ですか！？」

「フフそういうことよ。では、さよなら、生徒会！」

「ま、待ちなさい・・・！皆早く、朝倉くんと水無月さんを追って！」

「そんな、無茶ですよ～。なにも見えないし」

「くっ、ここまでですか・・・朝倉くん・・」

―理科室

俺と水無月は近くにあった理科室へと逃げこんだ

「水無月助かったよ」

「礼にはおよばないわよ。貴方は私の最高のパートナーだからね。助けないほうがおかしいぞ。」

「・・・・・・。それより、まさかあんなに生徒会が手強いとは。危うく生徒会に入れられるところだったよ。」

「そうね。だけどまだあれくらいならどうにでもなるわ。だけど朝倉、貴方はあのふたりを極力避けていたほうがいいぞ。」

「あのふたりって、茜先輩と菜穂先輩か。あぁ心がけておくよ」

「そうしなさい。そういえば朝倉、今何時間目だと思う？」

「え？３時間目だろ？・・・・・・あっ！！授業！」

「そういう事。さっさと行くわよ。」

～教室～

「すいません！！遅れました！」

「朝倉～、遅刻するとはいい度胸してるわね～。」

「い、いや先生、これには深い訳があって。」

「理由は聞きたくないよ。放課後職員室の私のところまで来なさい！」

「そんなぁ～、僕だけかよ。水無月も遅刻しましたよ」

「水無月？水無月なら最初からあそこにいるぞ」

先生は指さした。そこには

「な！水無月、お前いつの間にそこに移動してるんだよ！いまさっきまで僕と一緒にいただろ！？」

「ん？なにを言うの朝倉。私は最初からここにいたわよ」

「嘘だろ・・。」

「という訳で朝倉、放課後ちゃんと来なさいよ。」

「・・・はぃ。」

キーンコーンカーンコーンと丁度タイミングよくチャイムが鳴った。

「お、いいタイミングでチャイム鳴ったな。じゃあ休憩とってよし」

「フフ、大変ね朝倉。」

「とりあえず頑張ってね空。」

「同情するぜ朝倉。」

皆から俺は同情された。

「はぁ、まだ高校生活二日目なのに・・・。ほんとこれから先思い

やられるよ」

そして放課後・・・

「ふぅ、観念して行きますか・・・失礼します」

俺は職員室へと入っていった

「おぉ。朝倉やっと来たか。」

「あの先生、やっぱり説教ですよね？」

「ん～、あたしはそういうことめんどくさいから嫌いだけど、だけどまぁあんたはまだ高校生活始まって2日なのにいい度胸してるわよね。」

「いや、俺ほんと全然関係ないはずなんだけどな・・・」

「だが、今日授業に遅れてきたのは事実だな。ということで朝倉罰として教室の掃除綺麗によろしくね。」

「はぁ・・・。わかりました」

ということで俺は教室の掃除をひとりでするハメになった。

「ほんとなんで俺がこんな目に・・・だいたい水無月のせいなのに。」

ぶつぶつと文句をいいながら掃除をしていたら俺はどこからか視線を感じた。

「ん、なんだ?」

後ろを振り替えると誰もいなかった。

「気のせいかな?」

俺は再び掃除をはじめたがやっぱりなにか視線を感じた。

「やっぱり誰もいないよな・・・」

また振り返ってみたがやはり誰もいなかった。

「まぁいいか。掃除も終わったし、そろそろ帰ろう」

掃除道具を片付け校門の方へと向かった。

「ん？あれ、水無月？」

下駄箱のところには何故か水無月がいた。

「あら、朝倉今帰りなのね？」

「あぁ。やっと掃除が終わったからな。ところで水無月はなんでこんなところにいるんだ？帰ったんじゃなかったっけ？」

「部活よ」

「部活？え、お前って部活入ってたのか！？何の部活に入ったんだよ？」

「フフ、そんなに知りたい？でも残念だけど秘密よ。だけど近々教えてあげるわ」

「なんだよ、それ・・。んじゃあとりあえず帰るか」

「そうね」

俺と水無月は会話をしながら校舎を出ていった。
だが出た途端俺は校門の方に目を向けると不思議なものを見た。というより不審者を見た。

「な、なぁ水無月アレなんだと思う？」

「あのサングラスかけた人のこと？明らかに不審者ね」

「だよな。しかもなんかこっちめっちゃ見てるし」

その不審者は俺たちの事をジーッと見ていた。たぶん見た目的に言うと俺たちと年は似たり寄ったりな感じで女の子ぽかった。

「アレどうするよ？」
「とりあえず行ってみましょ。もしなにかあったとしても私達ふたりならなんとかなるしね」

「そうだな。相手は女の子っぽいし。んじゃ行ってみますか。」

そう言い俺達は校門のとこにいる不審者の所へと向かっていった。
そしてどんどん不審者と近くなるにつれて不審者は明らかに慌てていた感じをしていた。

「あっやばい走って逃げるかも。」

「その時は私達も走るわよ」

相手が走って逃げると予想した俺達は走る準備をしたが逃げようとした不審者はその場で何故かつまずいて転けてしまった。

「え・・・こけた。」

「フフ。豪快にこけたわね。あれ結構痛いはずよ」

「いやいや笑ってる場合じゃないでしょ。とにかく声をかけよう」

「う〜痛いよ〜。」

「ちょっと君大丈夫?」

「!?」

俺達が来たことに驚いたのか明らかに今さっきより動揺し始めた

「うわ、血でてるじゃん。とりあえず保健室行かないと。」

「えっ、えっとわた、私は・・・」

明らかに動揺しており何を言っているかわからなかった。しかも顔真っ赤にしてるし。

「いいから、それより早く背中に乗って。怪我してるだろうからろくに歩けないだろうし」

「え、ええーーー!?」

今度は大声で驚いた。よくわからない子だ・・・

「さぁ、早く」

半ば無理矢理俺は彼女の手を取っておんぶをした。

「よし、じゃあ保健室行こうか。水無月も俺ひとりじゃ不安だし来てくれよ」

「フフ、わかったわ。それにしても朝倉やるわね」

「何がだよ・・・。んじゃ行くよ」

「・・・・」

俺達は来た道を引き返し保健室へと向かった

ストーカー

～保健室～

「これでよし」
保健室に来たものの肝心の先生がおらず仕方ないので俺と水無月で簡単に薬を塗りテーピングをした。

「まだ痛いと思うけど我慢してね」

「は、はい！！あ、あありがとうございますす！」
今だに女の子は動揺していた感じだった・・・

「それより、聞きたいこと私達あるんだけど」

「は、はい。」

「あなたその制服から見る中等部の子よね。なんで中等部の子がこんな時間にいるの？中等部は今日早く終わったはずよね？」

そう中等部の子達は高等部と違い今日が入学式で午前中には家に帰れていたはずなのだ。早く終わっていたはずなのにどうしてこの子はここにいたのだろうか

「え、えーとその私は・・・・」

「おい、水無月そんなに一気に問い詰めなくても・・・。えっと君無理しなくて言わないでいいからね」

「ふぅ朝倉あんたはまだまだ甘いわね。この子がもしかしたら私達のスパイだったらどうするの？実際隠れてこっち見てたわけだし」

「いや、どうするのって聞かれても・・・」

「あの！！」

俺と水無月が会話しているなか急に女の子は声を張り上げてまさかの台詞を口に出して言った

「朝倉先輩好きです！！」

「あれ？なんで俺の名前って・・・えーーーッ！？」

本当に突然の事だった。突然の事で俺は固まってしまった

「フフ、朝倉あんたってやっぱりモテるのね」

「あの、あの私朝倉先輩が中等部にいる頃からずっと見てて、そのそれで・・・本当に朝倉先輩のことが大好きなんです！」

「中等部の頃から見てたって全然気づかなかった。・・・あ、もしかして今日俺が掃除中感じてた視線ってもしかして・・・」

「あ、それ私です。朝倉先輩が高等部の校舎に行ったから探すのに苦労しました。」

「はは、そうなんだ・・・」

「さて朝倉どうするの？」

「いや、どうするって言われても・・・」

正直困っていた。こんな経験初めてだしどう言えばいいのか・・・

「あの、駄目ですか？」

「えっと、俺まだ君のこと全然知らないし、ていうか名前ですら知らないし・・・そのぉ、今はごめんね」

「・・・・」

俺が断りをいれると女の子は黙った。やっぱり言い方が悪かったか

な。

「あの、朝倉先輩今は駄目ってことは私のことちゃんと知ってくれたらまだチャンスはあるってことですよね？」

「え、あ～まぁそういうことになるのかな？」

「だったら私先輩に私のこといっぱい知ってもらいますよ！よし、じゃあこれからは先輩にアピールしまくっちゃいます！」

「フフ、よかったわね朝倉」

「本当によかったんだろうか・・・」

「あ、まだ名前言ってませんでしたよね？私は中等部3年の相沢美琴(あいざわみこと)です！美琴って呼んでください！」

美琴は今さっきと違って元気に自己紹介をした

「あぁ、んじゃよろしくね美琴」

「はい！よろしくお願いします朝倉先輩。えっとそれで気になってたんですけど朝倉先輩の横にいる人は？」

「私？私は水無月彩音。朝倉の相棒よ」

「いやいや、誰が相棒だよ・・・」

「なるほど。水無月先輩もよろしくお願いします」

「えぇ。よろしくね美琴」

「さて、じゃあ自己紹介も終わったことだし、そろそろ帰ろうか」

「そうね。いつの間にかこんなに遅くなってるし」

時計を見てみると時計の針は5時半をさしていた。
そして俺たちは保健室を出て校門の方まで行った。

「朝倉先輩、水無月先輩、私は先輩達とは逆方向なのでここで」

「そうか。じゃあまたね」

「あの、朝倉先輩！」

「ん？」

「え～と、そのぉ・・・」
なぜか美琴は何かを言いにくそうにもじもじしていたもしかして・・・

「美琴明日からは隠れて見てるんじゃなくてちゃんと普通に話しかけていいからね」

「あっ・・・。はい！！」

「フフ。」

「それじゃあ朝倉先輩、水無月先輩、また明日！」
美琴と別れを告げ俺と水無月も家へと帰っていった。

「ただいま～」

「空君おかえり。遅かったから心配したよ～」

「ごめん、姉さん。ちょっと色々あってね」

「色々って？」

「えっとだから色々だよ！あ、それより姉さん風呂もう入れる？」

「うん、入れるよ。ご飯もできてるよ」

「じゃあ風呂の方先に入ってくるね」

「うん、じゃあ支度して待ってるね空君」

なんとか姉さんをごまかして風呂へと入っていった

「ふぅ～疲れた～。ほんと今日も色々とあったな」

俺は湯船につかると今日あったことを振り返ってみることにした。

生徒会の橘先輩には追いかけられ、生徒会長の菜穂先輩には生徒会

に入れられそうになりそして居残りで掃除をさせられて一つ年下の美琴には告白される・・・・

「はぁ～ほんと今日だけで色々あったな。まだ高校生活2日目なのに・・・・。明日もがんばらないとな」

この後かなり疲れていた俺はしばらく湯船にもつかっていた。

にぎやかな日々

～学校～

昼休み俺は渚、水無月、相馬と昼食をとっていた。

「なぁ、空明日どこか遊びに行かないか？」

「え、なんだよ急に」

「せっかく俺達皆友達となれたんだし、ここは早速明日でも遊びに行くべきだろ！」

「それいいね。ねぇ空明日遊びに行こうよ～」

「フフ、楽しそうね。私も明日は特にすることないし行こうかしら」

もう皆が行く気満々だった

「あぁ、確かにそうだな。じゃあ明日遊びに行こう」

「よし、決まりだな。あ、それと空、明日美人のお姉さま連れて来いよな」

「別にいいけど・・・。とりあえず姉さんには今日の夜にでも伝えとくよ」

「絶対だぞ！ちゃんと連れて来いよな！」

「だったら朝倉、美琴も誘ってあげなさい。朝倉が言ったら絶対来ると思うから」

「え？空、美琴って誰？」

「あ、えっといやただの後輩だよ！そ、そうだな美琴にも声かけてみるよ！」

「う～、明らかに空なんかごまかしたよ～」

「フフ」

くそぉ～水無月め。明らかに楽しんでるし。

「それより遊ぶって言ってもどこに行くんだ？」

「そうだったな、それを考えてなかったぜ」

「ねぇねぇだったら桜ヶ丘公園でお花見しようよ！今なら綺麗に咲いてるはずだよ」

「おっそれいいね！さすが渚ちゃん！じゃあ明日１２時に桜ヶ丘公園でいいな？」
「わかった」
「フフ、了解」

ということで明日桜ヶ丘公園で花見をすることになった。楽しみだな。
そして放課後・・・

「朝倉せんぱーーい！！」
「うわっ！びっくりした・・・」
帰ろうとしているとなぜか俺達のクラスに美琴がやってきた。
「ん？空その子知り合い？」
「あ、あぁこの子は・・」
「あ、どうも初めまして！中等部3年の相沢美琴です！確か朝倉先輩の幼なじみの渚先輩ですよね？」
「えっ、なんで私の名前知ってるの？しかもなんで空と私が幼なじみだってことも」

「えへへ～私朝倉先輩の事なら大抵の事知ってますから！」

「ちょっと空、どういう事なの！？」

「いや～その色々とあってだな・・・」

「フフ、美琴は昨日朝倉に告白したのよ。だから昨日からふたりは・・・」

「お、おい水無月！！」

なんとか水無月が全部言う途中口をふさいだが明らかに聞こえていた。

「えっ、空告白ってどういう事よ！？もしかして付き合ってるの！？」

「いや、だから～・・・」

「大丈夫です、神沢先輩。まだ朝倉先輩とは付き合ってません。というより今は先輩に私のこともっと知ってから返事だしてもらうようにしてます！」

「え、あ、そうなの？」

「全く渚はいつも早とちりするんだから・・・」

「う、ごめん空」

「ということで今日から神沢先輩とはライバルですね！」

「ちょ、ちょっと美琴ちゃんライバルって・・・」

「そういうことです。よろしくお願いしますね神沢先輩！」

そう言い美琴は無理矢理渚の手をとって握手をした

「ちょと、私は別に・・」

「フフ・・・面白くなりそうね。私もその内まぜてもらおうかしら。」

「くっそぉ、空ばっかりモテやがって。うらやましい、うらやましすぎるぞ！」

「・・・。あ、それより美琴明日昼ぐらいから空いてる？」

「はい、特に用事もないし空いてますよ」

「よかった。とりあえず俺達明日桜ヶ丘公園で花見する事になったんだけど一緒に来ないか？」

「え？いいんですか！？行きます行きます！朝倉先輩が誘ってくれたならどこへだって行きますよ！！」

「じゃあ、明日１２時に桜ヶ丘公園に集合な」

「やったー！楽しみです！先輩とお花見♪お花見♪」
本当に楽しそうに美琴はくるくるまわりながら喜んでいた。

「じゃあ、帰るか。明日の準備もあるし」

この後俺達５人は喋りながら家へと帰っていった

「ただいま～」

「おかえり空君。今日は早いんだね」

家に帰ると早くも姉さんが帰ってきていた。

「あぁ、うん。今日は特になにもなかったしね。それより姉さん明日用事とかある？」

「ん？明日は特にないよ。それがどうしたの？」

「明日、渚達と桜ヶ丘公園に遊びに行くことになったんだよ。それでよかったら姉さんも一緒に行かないかなと思って」

「え、行く行く！絶対行くよ！花見か～楽しみ～」

「よかった。じゃあ明日１２時に桜ヶ丘公園集合になってるから一緒に行こう」

「うん！あ、そうそうお姉ちゃんの友達もひとり連れていっていいかな？友達になったばかりなんだ～」

「たぶんいいと思うけど。まぁ人が多いほうが楽しいしね」

「ありがと空君！あぁ明日楽しみだな～。お弁当たくさん作らないとね」

ふと思ったんだけど姉さんの友達ってどんな人なんだろう・・・？
まぁ、それは明日になったらわかるか・・・。

「じゃあ、私は晩飯を作ってるね」

「うん。俺は晩飯部屋でゆっくりしてるよ」

そう言い俺は部屋に行き眠たいのでベッドに横になることにした。

そして翌日

「姉さ～ん、そろそろ行くよ」

「あ、ちょっと待って空君。荷物が重くて・・・」

姉さんは両手に本当に重そうな弁当箱やら飲み物を持ってヨロヨロと玄関まで来た。

「うわ、姉さん弁当作りすぎだよ・・・。」

「だって～楽しみだったんで作りすぎちゃったんだもん～」

「ん～、ほら姉さん貸して。弁当箱は俺が持つから姉さんは飲み物を持って」

「ありがとう空君～。ほんといい子に育ったね～」

「何言ってんだよ。ほら早く行かないと遅刻するよ」

「うん、じゃあ行こうか」

姉さんと俺は重たい荷物を持って桜ヶ丘公園まで歩いていった。

「遅いわよ。朝倉」

公園に着くともう皆は揃っていた。

「ごめん、ちょっと荷物が多すぎて」

「ごめんね、みんな～」

「いやいや瑞穂先輩のせいじゃないッスよ！それよりさぁさぁ瑞穂先輩そんなところに立ってないで早くこっちに来て座ってください。」

「相馬、俺と姉さんとの対応の差が半端なく違うと思うんだけど・・・」

「まぁまぁ、空も早くここに座りなよ」

納得いかなかったが渚に言われ座ることにした

「よし、全員揃ったな！」

「あ、ちょっと待って。まだ姉さんの友達が来てないんだけど」

「瑞穂先輩の友達が来るのか！？それは、楽しくなりそうだな！」

「なんで、お前そんなにニヤニヤしてんだよ・・・。それよりまだ来ないね姉さんの友達」

「うん・・・。時間はちゃんと伝えたんだけどね・・・・ん？あ、来たよ！おーいこっちだよー！」

姉さんが呼びかけている方向を見てみるとそこにいたのはまさかのあの人だった・・・

「なんであの人が・・・」

「ごっめーん瑞穂、遅れちゃった！ん？あれ？えっと朝倉君に水無月さん・・・？」

なんと僕たちの前に現れたのは生徒副会長の橘先輩だった。

「フフ、予想外ね。こんなところで生徒副会長が現れるなんて」

「いや、笑ってる場合じゃないだろ。それより姉さんの友達って橘先輩だったのか・・・」

「うん、そうだよ。あれ、空君、茜ちゃんのこと知ってたんだね」

「朝倉・・・。朝倉瑞穂、朝倉空・・・・・・って瑞穂の弟なの！？」

「うん！自慢の弟だよ」

「聞いてないわよ。でもまさか瑞穂の弟が朝倉君だったなんて・・・・。でも丁度いいかも？」

「へ？丁度いい？何が？」

「今ここで朝倉君と水無月さんとっ捕まえて生徒会長のもとに連れて行ってあげる！」

「えーー！ちょっと待ってくださいよ！！いくらなんでも今日はいいでしょ！」

「休みだからって関係ないわよ。さぁ朝倉君水無月さん覚悟しなさい！！」

「おぃ水無月どうするよ・・・。」

「やっぱり厄介なことになったわね・・・。朝倉ここはなんとしてでも逃げるわよ」

「こら3人とも喧嘩はだめだよ！」

「でも瑞穂、朝倉君と水無月さんは生徒会にとっての敵なんだよ！」

「それでも、ダメ！！今日は皆で楽しくお花見する日なんだよ！だから仲良くしなきゃ」

珍しく姉さんが声を大きくしていた

「うっ、瑞穂がそこまで言うなら仕方ないわね・・・。でも朝倉君水無月さん、学校では容赦しないわよ！！」

「は、はい・・・。助かった」

「フフ、望むところよ」

「うん、それでいいんだよ。さてとお弁当もいっぱい作ってるし皆で食べよ」
「おぉ瑞穂先輩の手料理！俺いっぱい食べちゃうよ！」

「空君も食べよう」
「あぁ、うんそうだね」

喧嘩？みたいなことも終わり皆で弁当を食べることにした

「えーーー！美琴ちゃんって空君のこと好きなの！！？」
「はい、私先輩のこと大好きです！だから瑞穂先輩朝倉先輩もらっちゃいますね！」
「むーーっ、簡単に空君は渡さないよ！勝負よ、美琴ちゃん！」
「負けませんよ、瑞穂先輩！」

なんか姉さんと美琴は結構気が合ってるな。

「水無月さん、あなたは朝倉君と組んでなんかいないでちゃんと正しい道に進みなさい！」
「フフ、私は朝倉とその内学校を支配するわ。それが私の正しい道よ」
「俺も混ぜて混ぜて」
「アンタはいらない」

水無月も橘先輩も意外と盛り上がってるし。でも相馬の扱いひどすぎるな・・・・。

ん？渚がなんかボーっとしてるな。

「どうしたんだよ、渚。ボーっっとしちゃってさ」

「あ、空。いや～桜綺麗だなぁって思って」

「あぁ確かに綺麗だな」

俺達の周り一面は桜が満開で綺麗に咲いていた

「ねぇ空。この桜ヶ丘公園に昔よく一緒に遊びに来たの覚えてる？」

「当たり前だろ。嫌というぐらいここには遊びにきたからな」

「そうだね。あの時はほんと楽しかったなぁ。またあの時に戻りたいなぁ」

「おぃおぃ。でも今も楽しいだろ？」

「もちろんだよ。でもね私はあの時が一番好きかも」

そう言うと渚は俺のほうを向き真剣な顔をした

「ねぇ空。聞きたいことあるんだけど」

「ん？何？」

「えっとね・・・・あのね・・・・ここでした、あの時の約・・・・・」

渚が喋っているとき急に強い風が吹いてきた。

「うわ、凄い風だったな。あ、それより渚なんて言ったんだ？」

「なんでもない。たいしたことじゃないから。それよりお弁当食べようよまだいっぱい余ってるよ」

「あぁ、そうだな」

渚が言おうとしたことが気になったが弁当を食べることにした

「そらく～ん」
「うわ、なんだ！？」
弁当を食べていると姉さんがもたれかかってきた
「ちょっと姉さんどうしたの！？っていうかなんでそんなに顔が赤いの？」
「え～おねえちゃんはべつにかおあかくないよ～。
明らかに姉さんの顔は赤くふらふらしていた。姉さんの後ろを見てみるとそこには空になっているお酒のビンがあった。
「姉さん、もしかしてお酒飲んだの！？」
「え～～、なにいってるの～おねえちゃんはおさけなんかのんでもせ～～ん！」
絶対酔ってるよこの人。
「ちょっと姉さんしっかり。ってイタッ！！」
姉さんを支えていると急に誰かに頭を叩かれた。
「あさくらくーーん！あなたってひとはねぇ、あなたってひとはねぇ！」
そこには姉さんと同様に顔を赤くしてふらふらな橘先輩がいた
「ちょっと橘先輩も飲んじゃったんですか！？」
「えーーーなにをーーー」
やっぱり飲んでるよこの人も。
「空～。皆酔っちゃってるよ。」
渚のほうを見てみるとそこには寝ている相馬と美琴がいた

「やっぱり俺たち以外飲んじゃってるのか」
「そうみたいだね。空どうする～？」
「どうするって言ってもな～」

「フフ、お困りのようね」
「あっ、水無月いたのかよ！？」
「空、それはさすがにひどいよ」
「それより水無月は飲んでないのかよ？」
「私も飲んだわよ、けど私の場合はちゃんと考えて飲んでるから大丈夫よ」
「そうなんだ」

まぁこいつが酔ったら相当やばそうだな

「それよりこれ本当にどうしよっか」
「担いで家まで送るしかないようね、朝倉」
「俺かよ。。しかも担ぐって言っても美琴や橘先輩、相馬の家知らないぞ」
「相馬はそこらへんに置いといていいわよ。美琴と橘先輩の家なら私が知ってるから教えてあげる。それと渚は瑞穂先輩を家まで送ってあげて」
「なんで知ってるんだよ。ていうかやっぱり相馬の扱いひどいな。それよりお前も手伝えよ、なんで俺がふたりも送らなきゃならないんだよ」
「しょうがないでしょ。私はここの片づけがあるんだから」
「うぅ・・・。まぁわかったよ。ここをそのままにするのもいけないし」
「フフ、いい子ね。それじゃあはい、これ。この紙に美琴と橘先輩の家の場所書いてるから」
「いつ書いたんだよ・・・・。じゃあ渚は姉さんを家まで頼むよ。

水無月は片付けのほうをよろしくな」
「任せなさい」
「空も、橘先輩と美琴ちゃんの事頼むね」

そう言い俺達は解散した。そして俺は酔っているこのふたりを見てため息をした。。
「ほら、美琴に橘先輩いい加減起きてくださいよ」
「ん～・・・・せんぱぁい。。おんぶ～・・・」
「おんぶは無理だよ！ほら、肩に手を回して、先輩も」
「うぇ～はきそ～。。」
「我慢してくださいよ。とりあえず先輩は手を繋いでっと。」

なんかぐだぐだな感じになったが先輩と美琴を支えて歩き出した。
まずは美琴の家に行くことにした

「ここか、意外とでかいな」
美琴の家は普通に立派な家だった。

「美琴、着いたぞ。ここから歩けるか？」
「う～～ん。せんぱぁいありがと～ございます～。なんとかだいじょうぶです～」
「お礼はいいから早く寝ろ」
「はい～それでは～」
美琴はふらふら歩きながら家の中に入っていった。

「さてと、あとは先輩だけか」
なんとか先輩を支えてゆっくりと地図を見て先輩の家へむかった。

「橘先輩着きましたよ」
なんとか橘先輩を抱えて橘先輩の家に辿り着いた。橘先輩の家も美琴と一緒で家が普通に立派で大きかった。

「ん～。あさくらくぅ～ん、へやまでつれてってぇ。」
「え！？部屋までって・・・。まぁこの状態じゃあまともに歩けそうにないし仕方ないか。橘先輩しっかりと僕につかまっててくださいよ。部屋まで行きますから」
「は～い」

橘先輩をしっかりとかついで俺は家の中へと入っていった。家の中は静まり返っていた。

「橘先輩の親は留守なのかな・・・・？それより先輩部屋どこですか？」
「う～ん。かいだんのぼってすぐのところ～」

すぐ目の前には階段があり僕は階段を上がってすぐのところの部屋があったので入っていた。その部屋にはベッドがあったので橘先輩を下ろし布団をかけてあげた。

「あさくらくぅ～んありがと～」
「いえ、それじゃあ俺は帰りますね」

「うん～。それじゃあね～」
「はい、おやすみなさい」
部屋の電気を消して俺は階段を下りていった。
階段を下りて玄関のほうに行こうとすると玄関には一人の少女が立っていた。

「あなた、誰？」

「あの～えっと先輩の家族の方？」

「それは私が最初に聞いてるんだけど。もしかして・・・泥棒！？」
「ちょ、ちょっと待ってよ！ただ俺は先輩が酔ってたから家まで送りにきただけだよ！」

「今さっきから先輩先輩って言ってるけどもしかしてお姉ちゃんのこと？」

「お姉ちゃん？あ、もしかして先輩の妹なの！？」
「そうよ。ってことはあなたはお姉ちゃんの学校の後輩ってこと？」

「うん。あ、俺は朝倉空。とりあえず先輩の後輩」

「なんだ、そうなんだ。それなら早く言えばよかったのに～。」
「いや、それは君が泥棒と勘違いしたから言うのが遅くなったわけで・・・。」

「あはは、まぁまぁそんなことは気にしちゃだめだよ、男の子なんだから。あっ、私は今さっき言った通りお姉ちゃんの妹の橘円香（たちばなまどか）。ちなみに高校1年だよ。よろしくね」

「橘さんは俺と同い年なんだ。他のクラスなのかな？」

「円香でいいよ。あ、私はお姉ちゃんと違う学校行ってるの。」

「なるほど。んじゃまぁ改めてよろしくね、円香」

「うん、よろしく朝倉」

なんとか円香との誤解を解き、このあと先輩が酔ったこと事情を説明し。

「全くお姉ちゃんは相変わらずおっちょこちょいなんだから・・・」

「おっちょこちょいって・・・。学校ではしっかりしてるように見えるんだけどな～」

「学校ではそうかもしれないけど家では凄い天然なんだよ！」

「へぇ、そうなんだ。俺の姉さんと一緒みたいだな、ていうより天然同士だから友達になったのか」

「朝倉にもお姉ちゃんいるんだ。お互い苦労するねぇ」
「はは、そうだね。それじゃあ俺はこの辺で帰るよ」
「うん、お姉ちゃんのことありがとね」
「いえいえ、それじゃあ」
円香と別れ俺は家へと帰っていった。

「ただいま～」
家に帰りリビングに入るとソファーで姉さんが横になっていた。
「そういえば姉さんも酒飲んだんだよな」

「あ～、そらくぅんかえってたの～」
「ただいま姉さん。大丈夫？」

「う～ん、だいじょぶだよ～。あ、そろそろばんごはんのじゅんびしなきゃ～」
この調子じゃあまともにご飯作れそうにないな・・・しょうがない。

「姉さんは寝ててよ。風呂と晩御飯は俺が準備しとくからさ」

「え～でも～・・・」

「いいから、いいから。たまには俺には手伝わせてよ。」

「う～ん、じゃあお願いしようかな～」

「うん、任せて」

この後俺は風呂を準備し普段は全くやらない晩飯作りをなんとか苦戦しながらも作ることができた。

だが、姉さんを何度も起こそうとしたが深く眠っていたため布団をかぶせ結局そのまま眠らすことにした。そして1人で晩飯を食べ、風呂に入り俺は部屋のベッドに横になった。

「あ～今日は楽しかったのと疲れたのでごちゃごちゃな感じだな。そういえば姉さん運んでくれた渚には学校で礼言っとかないとな・・・。そろそろ・・・眠くなってきた・・・な・・・」

今日の事を振り返っていると急に眠気が襲ってき俺はそのまま瞼を閉じた。

～翌日～

「姉さんはまだ寝てるな」

リビングに降りると昨日と同様に姉さんはまだ寝ていた。まぁ、あ

れだけ飲んでたらな・・・。

「暇だし、出かけようかな。」

特に行く場所なんてなかったがとりあえず出かけることにした。

外に出て商店街の方に行ってみるといつもより人がいた。

「さすがに日曜日だから人が多いな」

前へ進んでいってみるとそこで見覚えのある顔を見かけた。人混みをかき分けその人物へと俺は声をかけた

「おーい、円香！」

そこにいたのは円香だった

「ん？あ、空君だ。昨日ぶりだね」

「あぁ、そうだね。円香はここでなにしてるの？」

「特になにもしてないよ。お姉ちゃんがまだ昨日の酔いで寝てて暇だからぶらぶらと商店街に来ただけ。空君は？」

「俺も同じだよ。行くとこないから商店街に来ただけ。」

「へぇ、空君も今、暇なんだ。じゃあさこれから一緒にどこか行かない？」
「いいのか？」
「いいよ。だってどうせ1人でいてもつまらないでしょ。」
「確かに。じゃあご一緒させてもらおうかな」
「うん！じゃあどこいこっか？」
「そうだな～。円香はどこか行きたいところとかある？」
「私は別にどこでもいいよ。」
「どこでもか～・・・。じゃあ近場の喫茶店とかでもいいかな？ちょっと小腹空いちゃってさ」
「うん、いいよ。じゃあ行こう！」
俺と円香は近くにある結構お洒落な喫茶店に入り適当に注文をした
「空君っていつもこんなお洒落なお店来てるんだ～」

「いや初めてだよ。ていうかたまたま目に入ったから来ただけだよ」

「ふ～ん。な～んだいつも彼女さんとかと来てると思ったのに」

「待て待て、俺彼女いないし」

「へ～。本当かな～？怪しいな～」

円香はニタニタと笑いながら俺を見てきた。

「本当だって。彼女いるとしたら普通こんな休みの日に暇してないだろ？」

「ん～まぁ確かにそうだね。しかも普通は彼女いたら他の女の子と一緒にいないよね」

「だろ？」

「ん～、じゃあ信じてあげる」

「はは・・・、ありがと。そういう円香は彼氏とかいないの？」

「私もいないよ。だいたい今さっき言ったでしょ、彼氏いたら空君とは一緒にいないって。それに今はお姉ちゃんの面倒みるので精一

杯だし」

「面倒って・・・。おっちょこちょいって昨日言ってたけどそんなにひどいのか・・・」

「ひどいってもんじゃないよ、あの人はね・・・」

注文したものがきた後も円香は先輩の駄目なところを俺に愚痴りだした。
それより、先輩ってそんなにひどかったのか・・・

「というわけなのよ」

「へぇ・・・なるほどね・・・」

「ところで空君のお姉さんはどうなの？そっちも天然って言ってたけど」

「姉さんは確かに天然だけど、家事や勉強とかに関したら凄いできるんだよ。それに俺のことも考えたりしてくれるし、俺は姉さんのことといい姉と思ってるよ」

「空君はお姉さんのこと好きなんだね～」

「うん、本当に姉さんには感謝してるから」

「空君はいいな～、そんなにいいお姉さんがいるんだから。私も空君のお姉さんみたいな人がよかったな」

「おぃおぃ、それはさすがに先輩に失礼だろ。でも先輩にもいいとこぐらいあるだろ？」

「冗談冗談。ん～確かにお姉ちゃんにもいいところはたくさんあるよ」

「そうだろ。まぁ先輩と仲良くね」

「ふふ、なんかそれじゃあお姉ちゃんと私が仲悪いみたいじゃないの～。」

「はは、確かに。さて、そろそろ食べたし出ようか」

「うん！」

会計は割り勘で支払い俺達は外へ出た。

「喫茶店でここまでいたのは初めてだな。もう3時だし」

「私もここまでいたのは初めてだよ～。さて、次はどこに行く？」

「え、まだ行くのか！？」

「当たり前じゃん、だってまだ3時なんだよ。それとも、空君は私といるのはいや？」

円香は上目遣いで俺を見てきた。さすがに女の子にここまで見られたらもう、なんとも言えないだろ・・・

「嫌なわけないだろ、じゃあ次行こうかー」

「わーい♪じゃあ水族館行こうよ！」

「え、今から！？行くのにも電車で1時間はかかるんだぞ」

「大丈夫だよ！さ、いこいこ！」

「お、おい！ちょっと！」

俺は円香に引っ張られるように水族館へと向かっていった。

「やっと着いた」

結局水族館に時間をかけて来てしまった。

「さぁ空君行きましょ♪」

「そうだね。まぁ、折角ここまで来たんだし楽しもうか！」

チケット大人2枚を買って中へと入っていった。

「空君みてみて！魚がいっぱいいるよ！」
たくさんあるガラスの向こうには様々な魚がいて優雅に泳いでいた。
「ほんとだ、たくさんいるね。」
「凄いな～。私水族館って小さな頃に一回しか来たことないからあんまり記憶に残ってなかったからここまで凄いなんてビックリだよ！」
円香はほんとに喜んでるな。最初はめんどくさいと思ってたけどこんなに喜んでくれてるとこっちも来た甲斐があったって思えるな。
「ねぇねぇ、空君次はあっち行こうよ、あっち！」
「そうだね。よし、行こう！」
この後たくさんの所に回っていった。そして日も暮れてきたので俺達は帰ることにした。
電車の中ではよほどはしゃぎ疲れたのか円香はウトウトして眠たそうにしていた
「円香大丈夫か？もうすぐで着くから我慢してよ」
「う・・・ん。でも・・・少し・・・だ・・・け・・・」
円香は頭を俺の肩に預け眠りに入ってしまった。
「お、おい。全く仕方ないな。あれだけはしゃいでたらな。着いたら起こしてやるか」

俺も円香が気持ちよさそうに寝ている姿を見ていたら眠たくなってきたがそこはなんとか我慢して起きていた。

「円香、円香！起きろ、もう着いたよ！」
「あれ、空君？」
「やっと起きた・・・。早く電車降りるよ、もう着いたから」
まだ寝ぼけている円香手をなんとか引っ張りながら外に出た。

「ふぅ、危ないところだった。」
「ごめんね、空君まさか眠っちゃうなんて」
「大丈夫だよ。それより早く帰ろう。もう夜だよ」
時計を見るといつの間にか7時半になっていた。俺達は急いで家に帰ることにした。

「空君ここでお別れだね」
「いや、家まで送るよ円香」
「え、でも空君、私を送ってたら帰り遅くなるし・・・」
「大丈夫だよ、姉さんには遅くなるってメール送っといたしそれにこんな夜道に女の子ひとりじゃ危ないだろ」
「やっぱり優しいね空君は。じゃあお願いしようかな」
「うん、任せて」

この後話しながら円香とまたしばらく話しながら円香の家に向かっていった。

「あそこにいるのって先輩じゃないか？」
「え、お姉ちゃん！？」

円香の家に着くと先輩が家の前に立っていた。そして先輩も俺達ふたりに気づいたようだ。

「遅いわよ、円香！遅くなるなら電話ぐらいしなきゃ。」

「ごめん、お姉ちゃん。すっかり電話のこと忘れてたよ」

「まぁちゃんと帰ってきたからいいんだけどね。それよりさっきから気になってたんだけどなんで朝倉君がいるの？」

「はは、こんばんは先輩」
「いやいやこんばんはじゃなくて・・・。知り合いだったのふたりとも？」

「えっと円香とは昨日先輩の家で知り合ったばっかりですよ」

「え、家って昨日朝倉君ここに来てたの？」

「何言ってるのよお姉ちゃん！昨日酔って帰ってきたお姉ちゃんをここまで運んでくれたのは空君だよ！」

「えー！！そういえば昨日朝倉君がなんか部屋まで連れてきてくれたような違うような・・・」

どうやら先輩は昨日の酔いで記憶が曖昧のようだ。

「全くお姉ちゃんは～」

「うう・・・朝倉君ごめんなさい。昨日は迷惑かけてしまって」

「いえ、全然大丈夫ですよ。それに他のやつらも先輩みたいに酔っていたし」

「でも、今日は円香と一緒に遊んでいたわけだよね？昨日知り合ったって言ってもちょっと仲良くなりすぎじゃない？もしかして付き合ってるの！？」

「なッッ！！」

「うん、付き合ってるよ」「おい、円香！なに言ってるんだよ！？」

「やっぱりそうなんだ～。でも円香、相手は桜川学園で今一番の要注意人物の朝倉君だよ！」

「要注意人物って・・・。先輩、これは円香の嘘ですからね。ほら、円香も嘘言うなよ・・・」

「あはは、ごめんごめん。お姉ちゃんからかうと面白いからさ。お姉ちゃん今のは嘘。空君と付き合ってないよ」

「ほんとかしら～。まぁ円香が幸せならそれでいいけどね」

先輩ほんとに今のことわかってくれたんだろうか。

「さぁさぁ、円香中に入ろ。朝倉君も早くしないと瑞穂に怒られるわよ？」

「あ、そうだった！それじゃ先輩に円香！」

「今日はありがとう！空君！」

「朝倉君今日は見逃してあげるけど明日からは手加減なしよ！」

円香達と別れ今度は大急ぎで家に帰っていった

家に着くともう8時になっていた。

家の中に入ってリビングへ行くと姉さんは料理を作ってテーブルで待っていた

「ただいま姉さん、遅くなってごめん！」

「空君遅いよー！お姉ちゃん心配したんだからね！あんまり遅いからもう少しで警察に電話するところだったよ～」

「警察って・・・。でも、ちゃんとメールはしたでしょ？」

「それでも心配だったんだよ～！空君の身になにかあったら私・・・」

どうやら本気で姉さんは心配だったらしい。ちょっと反省しないと

な。

「ごめん姉さん。これからは気をつけるよ」

「うん・・・」

「さてと、お腹も空いたしご飯食べようよ姉さん」

「空君ご飯食べる前にもうひとつあるんだけど？」

「え、なに姉さん？」

「こんな夜遅くまでなにしてたの？」

やっぱりこの質問きたか。さて、どう答えるか・・・。

家に着くともう8時になっていた。

家の中に入ってリビングへ行くと姉さんは料理を作ってテーブルで待っていた

「ただいま姉さん、遅くなってごめん！」

「空君遅いよー！お姉ちゃん心配したんだからね！あんまり遅いからもう少しで警察に電話するところだったよ～」

「警察って・・・。でも、ちゃんとメールはしたでしょ？」

「それでも心配だったんだよ～！空君の身になにかあったら私・・・」

どうやら本気で姉さんは心配だったらしい。ちょっと反省しないとな。

「ごめん姉さん。これからは気をつけるよ」

「うん・・・」

「さてと、お腹も空いたしご飯食べようよ姉さん」

「空君ご飯食べる前にもうひとつあるんだけど？」

「え、なに姉さん？」

「こんな夜遅くまでなにしてたの？」

やっぱりこの質問きたか。さて、どう答えるか・・・。

「え～っと・・・それは、その～・・・。あ、アレだよ！」

「アレ？」

「相馬と遊びに行ってたんだたよ！あいつと遊んでたらいつの間にか夜になっててさ～」

円香と遊んでいたことを正直に話すと面倒なことになりそうなので相馬と遊んでいたという嘘にした。

「嘘だね」

「え・・・なんで？」

だがその嘘も１０秒ともたなかった。

「だって空君困った時とか嘘言うとき絶対目をそらしてあわそうとしないんだもん」

自分が気づかない内にどうやら姉さんと目をあわそうとしてなかったようだ。

「ねぇ空君、本当のこと言って？」

やっぱり姉さんには嘘はつけないようだな。

「わかったよ。今日は・・・」

俺は昨日先輩の家で円香と出会ったこと今日円香と遊びに行ったことをできるだけ詳しく伝えた。

「なるほど～。円香ちゃんと遊びに行ってたのか」

「あれ、姉さんは円香のこと知ってたの？」

「うん。茜ちゃんの家に遊びに行った時に何回か会ったよ」

「そうだったんだ。じゃあ円香も姉さんのこと知ってるってことか」

「でも、まさか円香ちゃんとこんな遅くまで遊びに行ってたのか～。円香ちゃんうらやましいなぁ」

姉さんは明らかになにかをおねだりするような目で俺を見つめてきた。

「わ、わかったよ姉さん。じゃあ来週どこか一緒に行こうよ・・・」
「やったぁ！空君絶対だよ！約束だよ！？」

「うん、約束するよ」
なんとか姉さんを落ちつかせることができ俺はそそくさと風呂に入り部屋に行き疲れた体をベッドにめがけ倒れた。

「今日もなかなか疲れたけど楽しかったな～。円香か・・・なんか先輩より円香のほうが姉っぽかったな。まぁ、またいつか円香ともこうやって遊べたらいいな」
いつも通りしみじみ今日のことを思いだしているといつの間にか瞼を閉じていた

前途多難のゴールデンウィーク

高校生となって早1ヶ月も経った。5月になると少しは高校生活にも慣れてきたとは思う。
だけどさすがにあの1件以来生徒会の人たちは苦手だけど・・・。
しかも俺関係ないはずなのに。

「疲れてるわね朝倉」
姉さんと登校途中考えてごとをしているといきなり水無月が現れ話しかけてきた。

「お前いつの間に・・・。」
「フフ。困っているなら私に相談しなさい」
「いや、別に困っていることはないんだけど。ただ生徒会が・・・」
「生徒会・・・。確かに朝倉と私の計画にめんどくさい相手ね」
「いやいや待てよ。計画ってなんだよ!?」
「まだ朝倉には秘密よ。もう少ししたら教えてあげるかど」

「なんか知りたいような知りたくないような・・・」

そんな話をしながら俺達は登校するのだった。

〜桜川学園〜

「じゃあ姉さんここで」
「うん。またね空君、彩音ちゃん」
「それでは朝倉先輩」

姉さんと別れて教室にむかうと相馬と珍しく早く渚が来ていた

「空に彩音おはよ」

「おいっす」

「ふたりともおはよう。あれ渚が俺より早く来るなんて珍しいね」

「む～なによぉ珍しくって！私だって早く来る時ぐらいあるよ～」

「へぇ渚ってそういう時もあるのね」

「も～彩音まで～！」

こうしてみんなを見ているとほんと初めて会った時より仲良くなったと思うな。

「なにボーっとしてるんだ空？」

「いやなんでもないよ」

「それより今度のゴールデンウィークどうするよ？」

「いや、特になにも考えてないけど」

「なんだよ、おもしろくないやつだな～！」

「空は毎年ゴールデンウィークの時は外に出るのはだるいからって言ってほとんど家で寝てるじゃない」

「なんで渚が知ってるんだよ！？」

「だって毎年ゴールデンウィークに空の家に行ったら部屋で寝てるんだもん」

こいつ勝手に俺の部屋入ってたのか・・・。

「そういえば起きたらリビングに毎日お前居たな」

「なんだと！？空は毎年渚ちゃんとゴールデンウィーク過ごしてい

るのか！！」
「いや、こいつが暇だとか言って勝手に来てるだけだよ…。それに姉さんもいるし」
「くっそー！！なんてうらやましい奴なんだよ！お前なんて地獄に落ちやがれ！」
「なんだよ、それ…」

「だったら今年は私が朝倉の家に行っちゃおうかしら」
「えっ…なに言ってんだよ水無月」
「あら、渚はいいのに私はいけないのかしら…」
こいつ絶対になにか企んでる…。でもこいつ断ったら大変なことになりそうだしな。

「まぁ別に来てもいいけど」
「フフ、いい子ね」
「俺も俺も！空の家行くぞ！」
「じゃあ私も！」
あ～なんかややこしいことになってきたな…
「フフ。それじゃあ決定ね。ゴールデンウィークは朝倉の家に皆で行くわよ」

「あぁ、もう勝手にしてくれ！」

「おーい！皆席につけ。朝のホーム始めるぞー」
結局水無月たちはゴールデンウィークは俺の家に来る事になった。

俺はなぜか今年のゴールデンウィークは大変なことになりそうだなと考えながら今日一日過ごすのだった。

「朝倉せーんぱい♪一緒に帰りましょ」
「いいけど、わざわざ教室まで来なくてよかったのに」
「だって朝倉先輩と一緒に帰ることが楽しみですから」

「美琴いいところにきたわね。美琴はゴールデンウィークはどう過ごすの？」
「いえ、まだなにも考えてないですよ」
「お、おいお前まさか…」
「フフ、美琴ゴールデンウィークには朝倉の家に遊びに行くことになったからあんたも来なさい」
「えっ！朝倉先輩の家ですか！？行きます行きます！」
「決定ね。いいわね朝倉？」
「お前なぁ…」
「あの、朝倉先輩私行ってもいいですか？」

美琴におもいっきりこんなに見つめられたらさすがに断ったりもできないだろう。
「全然大丈夫だよ」
「やったぁ！私楽しみにしてますね！」

「あ、空君遅いよ～」
「ごめん姉さん。教室でちょっと話してて」
「空、瑞穂先輩にゴールデンウィークのこと話しておいたほうがいいんじゃない？」

「そうだな」
「ん？ゴールデンウィークのことってなに？」
「え～と実は・・・」

俺は姉さんにゴールデンウィークについての予定を簡単に話した。

「なるほど～。皆家に遊びに来るんだ！楽しみだな～。じゃあ私も茜ちゃん呼ぼうかな～」

「是非！茜先輩も呼んでください！美女が増えるのは俺様大歓迎！！」

「おい、相馬！茜先輩が来たら俺がヤバいんだけど・・・。また追いかけられたり説教がありそうだし・・・。なぁ水無月・・・？」

「私は全然いいわよ。そのほうが面白そうだしね」
「面白そうって・・・。ま、まぁ姉さんの友達だし。しょうがないか。危なくなったら逃げればいいし」

「ありがとう空君。じゃあ明日にでも茜ちゃん誘っておくね」

「よっしゃー！今年のゴールデンウィークは楽しくなりそうだぜ！」

「フフ、楽しみね」
「先輩の家・・・。あわわ」
「空の家よく行ってるけど今年はもっと楽しくなりそうだね」
皆予定をたててはしゃいでるけど俺的にはあまり喜べないんだが…
「ん？空どうしたの？」
「いや、なんでもないよ。それよりここで話してるのもあれだしさっさと帰ろう」
この後もゴールデンウィークのことを話しながら俺たちは帰っていった。
そして夜…

「空君電話だよ～」
「え、姉さん橘先輩と電話してなかったっけ？」
「なんか空君に代わってほしいらしいよ」
「先輩が？一体なんだろ…」
嫌な予感がすると友に電話を代わった
「もしもし…」
「あ、空君だ！お久しぶり！」
あれ、この声って確か…
「えっともしかして円香？」
「そうだよ。もしかして気づかなかった？
「いや、なんで円香が俺に電話してるのかと思ってさ」

「なるほど。それより空君のお姉ちゃんって瑞穂先輩だったんだね！？」
「あぁそうだよ」
「まさか瑞穂先輩が空君のお姉さんだったなんて私びっくりしたよ。これもなにかの縁かな～？」
「はは、そうかもね」
「あ、それで本題なんだけどさ～」
「ん？本題？」
「うん。ゴールデンウィークにお姉ちゃんが朝倉君の家に遊びに行くらしいけど私も行っていいかな？」
「あれ？なんで円香がゴールデンウィークに先輩が家に来ること知ってるの？」
「今さっきお姉ちゃんと瑞穂先輩が電話で話してるの横で聞いててお姉ちゃんに無理矢理電話かわってもらったんだよ」
「なるほど。俺は別にいいよ」
「ほんと！？ヤッター♪」
「じゃあまたゴールデンウィークにね」
「うん！ゴールデンウィーク楽しみにしてるね。それじゃあね空君！」
電話を切った後、考えてみるとなんか流れで円香が家に来るの承諾したなと思った。
まぁ円香なら特に変なこともしないだろう・・・。
「空君、ご飯できたよー」
「うん今行くよ」

ゴールデンウィークまでまだ5日はあると思っていたらいつの間にか5日過ぎてしまいついにゴールデンウィークの日初日を迎えるのだった

「ついにこの日が来たか…」

「空君おはよ～。皆もうそろそろ来るから部屋綺麗にしとかないとね」

姉さんは鼻歌まじりで掃除を始めた。そんな姉さんを横目に見ながら俺はソファーでボーっとただ座っているのだった。

「何呆けてるのよ」

「あ、渚来てたんだ」

「空が起きてくる1時間前には来てたよ。ほんと朝弱いんだね」

「色々考えてたら寝れなくてね」

「色々ね～。それよりここで呆けてる暇があったら瑞穂さんを手伝ってあげなよ」

「わかってるよ」

めんどくさいと思いながらも姉さんを手伝いに行こうとしたらチャイムが鳴った

「来たか」

「おいーっす空！」

「フフ、来てあげたわよ」

玄関に行くと既に相馬と水無月が中に入ってきていた

「いらっしゃい。あれ、2人は一緒に来たの？」

「いいえ、相馬は道で迷っててうろうろしていたから私が助けてあげたの」

「なるほど」
あんなにわかりやすく地図書いて相馬に渡したのに迷っていたのか・・・。

「まぁそういうことだ。それじゃ、お邪魔しまーす！」

「お邪魔するわね」

相馬と彩音が中に入っていったので俺も戻ろうとしたがまた再びチャイムが鳴った。

「はーい」
ドアを開けるとそこには茜先輩と円香がいた。

「ヤッホー空君♪」
「こんにちは朝倉君」

「いらっしゃい円香に茜先輩」
「今日はご招待ありがとう朝倉君。でも気は抜かないようにね。私達はあくまで敵みたいなものだから」

「はは、わかってますよ・・・」
「お姉ちゃん、そんなことより早く中に入ろうよ。朝倉君も」

「ええ、そうね」

円香に助けられこの場はなんとかなったがこの後なにかあるんじゃないかと心配になった

「茜ちゃんに円香ちゃんいらっしゃ～い」
「瑞穂今日はお世話になるわね」
「瑞穂先輩、ご招待ありがとうございます」
「いえいえ、なにもないところだけど楽しんでね」

「おい、朝倉あの茜先輩の隣にいる美少女は誰だ？」
「あぁ、茜先輩の妹だよ」
「なに！茜先輩に妹が居たのか！？だが、それよりなんでお前が茜先輩に妹が居たこと知ってるんだ？」
「まぁ、この前色々とあってね」

相馬と話しているとき円香は俺達のところへやってきた。
「初めまして。橘茜の妹の橘円香です。よろしくね！」
「円香ちゅわんよろしく！俺相馬！」
「フフ、まさか妹がいるとはね。水無月彩音よ。よろしくね円香」
「私のことは渚って呼んでくれていいからね。よろしく円香ちゃん」

「うん！よろしくね皆！」
どうやら円香はもうここにいる皆と打ち解けたようだ
「空君もまたよろしくね」
「あぁ、よろしく」
「またって空と円香ちゃんは今日が初めて会ったんじゃないの？」
「えっと、それは・・・」
「空君とは少し前お姉ちゃんが酔ってた時連れて帰ってきてもらって初めて会ったんだよ。あと一緒に遊びにも行ったんだよ。あの時は楽しかったな～」
「一緒に遊びに？」
途中までいい感じだった空気が嘘のように変わった。絶対円香の言った事だ・・・
「おい、空！円香ちゃんと一緒に遊びに行ったのか！なんでお前ばっかり！！」
「そうだよ！空どういうことなの！？」
「フフ、修羅場ね・・・」
水無月の言ってることはともかく渚と相馬をどうにかしなければ・・・
「だから、たまたま外で会って遊びに行っただけだって！だよな、円香？」
「え～それだけだったかな～？」

円香のやつこの状況を楽しんでる・・・。
「お前なんて地獄に落ちてしまえ！」
「ちゃんと説明してよ空！！」
ヤバい・・・円香がちゃんと言ってくれないから状況がもっと悪い方向に・・・。

「ほらほら、皆もうお昼だからそろそろ食べましょ」
俺が戸惑っているとタイミング良く姉さんがご飯を持って現れた。
「今日の昼食は空君の好きなお姉ちゃん特製チャーハンよ！」
「おぉ！瑞穂先輩の手作りチャーハン！」
「姉さんのチャーハンかぁ！おいしいんだよな。ほら、早く渚も食べに行こう」
「ちょっと、空！話しはまだ終わってないんだからねー！」
喋っている渚の手を無理矢にとり食べに行った
「フフ、楽しくなりそうね」

「うおー！！瑞穂先輩の料理マジうめぇ！」
「おい、落ち着いて食べろよ相馬」
「これが落ち着いてられるかよ！なんならお前のぶんも食べてやってもいいぜ」
「誰がお前にやるか！」
「でも、瑞穂さんの料理久しぶりに食べるな～。ほんとおいしいです！」
「ありがとう渚ちゃん♪」
「でも本当に瑞穂の料理はおいしいわね。私も料理練習してみようかな・・・」
「お姉ちゃんが料理したらとんでもないことになるからやめておこうね」
「ちょっと円香とんでもないことってなによ！」

「フフ、なら私もやってみようかしら料理。その時は朝倉試食の方はよろしくね」
「考えておくよ・・・」
食事中は皆で様々な会話をしながら食べていた。
やっぱり人が多い方が食事は楽しいな。
「ふぅ、食べた食べた」
食べた後俺はソファーに横になった。

「こら～空。食べた後すぐ寝ると牛になっちゃうよ」
「別にいいじゃん。お腹いっぱいなんだよ」
「む～、早く起きなさーい！」
そう言うと渚は横になっている俺の体を無理やり起こそうとした
「お、おい渚やめろって・・・。ちゃんと後で起きるから」
「今起きなさいよ。今！」
「ふたりとも仲いいんだね～」
俺と渚がくだらないことで言い争いをしていると円香が話に入ってきた
「これが仲いいように思えるか？」
「そうだよ円香ちゃん！私はただ空を起こそうとしてただけで・・・」
「でも私から見たらじゃれあってるようにしか見えないんだけどな～」
「だから、そんなんじゃないよ」
あたふたしながら渚は必死に説明していたが円香はいまいち納得していなかった
「フフ、モテる男は辛いわね朝倉」
「そんなこと言ってないでなんとかしてくれよ」
水無月に助けてもらおうとしたがこいつに頼んだ俺が間違いだった

「ふたりとも甘いわね」
そう言うと水無月はいきなり俺の手を握ってきた
「あー！彩音なにやってるの！？」
「空君もなに嬉しそうな顔してるの！？」
「ちょっと待て俺は全然嬉しそうな顔してないし、ほんとなにやってんだよ水無月！」
「フフ、なにって私は朝倉を助けてあげてるのよ」
「全然助けになってないよ！」
「こらーはやく手を離しなさいよー！」
渚と円香が必死に水無月の手を離そうとしていたがなかなか水無月は手を離そうとしようとはしなかった
そんなことを続けていると電話が鳴り始めた
「あっ、電話だちょっと水無月手離してくれよ」
「仕方ないわね…」
なんとか電話に助けられ俺は電話にでた。
「もしもし朝倉です」
「あ、先輩！私です。美琴です！」
「あ～美琴か。どうしたんだ皆来てるぞ」
「はい、私も早く行きたいんですけどちょっと用事ができちゃって・・・」

「あ、そうなのか。じゃあ今日は来れそうにないか」
「いえ、夕方頃には絶対行きます！」
「いや、そんなに急がなくても明日もあるし大丈夫だぞ」
「私は今日行きたいので！それじゃあ待っててくださいね先輩！」
そう言うと美琴は電話を切った。
「夕方来ても遅いだけなんだけどなぁ。まぁ来るのを待ってるか」

そして皆でいつものように話などをしているといつの間にか夕方になって時計の針は5時をさしていた。

「そろそろ美琴が来るはずなんだけど・・・」
美琴の事を考えているとタイミングよくチャイムが鳴った。
「あ、美琴ちゃんが来たんじゃないの？」
「多分そうだね。俺が出るから姉さんは座っててよ」
「うん。空君ありがとう」
玄関に行きドアを開けると美琴がいた。
「こんにちは、先輩！来ちゃいました」

「あぁ、うん。待ってたよ。とりあえず中に入りなよ」
「はい！お邪魔しまーす」

「あ、美琴ちゃんいらっしゃい」
「はい、お邪魔します瑞穂先輩」
「あれ、瑞穂先輩この子は？」
「そういえば円香ちゃんは美琴ちゃんに会うの初めてだね。美琴ちゃんは私達の学校の後輩だよ」
「そうなんですか。初めまして美琴ちゃん。私はそこにいる茜の妹の円香だよ。よろしくね」
「はい、よろしくお願いしますね円香先輩！」
「あのさ、自己紹介してるところ悪いんだけどさちょっといいかな？」
「なんですか、先輩？」
「えっと、ずっと気になってたけど美琴もそうなんだけど皆もなんでそんなに荷物多いの？」
「お泊まりセットですよ」

「お泊まりセット？え～っとお泊まりってここで？」
「はい、そうですけど。先輩聞いてないんですか？」
「俺聞いてないんだけど・・・。皆もまさかそのつもりで・・・」
「当たり前じゃん。俺なんか遊び道具大量に持ってきたぜ！」
「私とお姉ちゃんもお菓子とかたくさん持ってきたよ」

どうやら皆は本当に泊まるつもりで来ていたらしい

「水無月は知ってたのか？」
「フフ、当たり前じゃない。このお泊まり計画は私が考えたんだし」
「お前だったのか・・・。なんで俺に知らせなかったんだよ？」
「だってそのほうが面白いじゃない」
「面白いって・・・あのなぁ・・・」
「あ、あの先輩。私先輩がいやだったら私帰ります」
「いや、ただ俺はびっくりしただけだよ。だから大丈夫だよ」
「ありがとうございます先輩！」

毎回思うが美琴の上目遣いに俺弱いんだよな・・・

「もちろん私も泊まっていくよ空！」
「別に渚は家が隣なんだから泊まらなくてもいいだろ」

「だって私だけ仲間はずれなんて嫌だもん！」
「わかったよ・・・」
こうして皆は家に泊まることとなった。
「おーいみんな温泉行こうぜ！」
「わざわざ温泉行かなくても家の風呂に入ればいいんじゃないの？」
「わかってないな空！温泉は皆で行くから楽しいもんだろ！それに温泉とか普通じゃあまり行かないからこういう機会に行くべきだと思うぜ！！」
「あ、あぁわかったよ。じゃあ皆温泉行こう・・・」
「さすが空！親友！」
なんか相馬のやつ凄い力説だったけどまさかなにか考えてるんじゃないだろうか・・・。
「わーい温泉だ！やっぱりこの近くの温泉だというと桜川温泉ですね」
「フフ、楽しみね。たまには榎本もいいこと言うじゃない」
こうして俺たちはここから近くの桜川温泉に行くことになった。

「ここの温泉久しぶりに来るな」
「そうだね～。よく空君と渚ちゃんと来てたよね」
「さ、みんな入ろうぜ！」
「それじゃあ先輩ここで！」
「お姉ちゃん早く入ろうよ！空君後でね～」

俺達はそれぞれ男湯女湯に分かれて入っていった。
ちなみにここの温泉は混浴ではない。

「ふっふっふ・・・」

服を脱ごうとしていると急に不気味な声で相馬が笑いだした。

「どうしたんだ相馬？急に笑いだしたりなんかして」

「これが笑わずになんかいられるかよ。実はなこの温泉の男湯には秘密ののぞきポイントがあるのだよ！」

「お前もしかしてそんなことのために温泉に行こうとか言ったりしたのか・・・」

「そんなことだと！せっかく俺が親友であるお前を秘密ののぞきポイントに連れていってやろうと思ったのに！」

「いや、俺は別に・・・。ていうかなんでお前がそんな秘密なところを知ってるんだよ？」
「フッ、無駄に桜川温泉に通いつめた俺をなめるなよ。それぐらい知ってて当然さ」
「はぁ、そうなのか」
「さぁ戦場へと向かうぞ空！！」
「おい！待てよ俺は別に・・・」
相馬は俺の話を聞かずに無理やり引っ張り中へと入っていった。

「さぁここだ空！」
外の方にある秘密ののぞきポイントというところに来たがそこはなにひとつ変わらず温泉があるだけだった
「どこだよ・・・」
「落ち着け落ち着け。壁のところにある石をのけてだな・・・」

そう言うと相馬は男湯と女湯を区別する壁のとこにある少し大きめの石をのけた。すると、のけたところから小さな穴が見えた。

「どうだ、空！」

「どうだって言われても・・・。なぁやっぱり普通に温泉に入ろうぜ。それに他の人もいるし明らかに俺達怪しいし」

「なにを言ってるんだ！？他の人は関係ない！お前は見たくないのか女性陣の裸を！」

「いや、でもなぁ・・・」

「渚ちゃん、瑞穂先輩の裸はどうだ！？」

「どうって言われてもあの2人は小さい頃一緒に風呂に入って何回か見たことあるし・・・」

「小さい頃と一緒にするな！今は絶対半端ないぞ！！じゃあ水無月に美琴ちゃんは！？」

「水無月はなんかあとが怖いし・・・。美琴は・・・・・ってなんでこんなこと考えなきゃならないんだよ！」

「円香ちゃんに茜先輩はどうだ！？」

「うッ・・・。」

あんまり考えたくないけどこいつの凄い迫力に負けて皆の裸の姿を想像してしまう・・・

「フッ、どうやらお前の負けのようだな空。さぁ夢の世界へと行くぞ！！」

そう言うと相馬は小さな穴をのぞきはじめた。

「お、おい。やっぱりまずいって！」

「こら静かにしろ！・・・・ん、あれは・・・？」

喋っていた相馬が急に静かになった。

「どうしたんだ？」

「なんてすんばらしいボディラインなんだ！それになんちゅー美肌！」

なんかこいつ喋り方変わってるような・・・。

「空こっち来い、ここ見てみろ！早く！」

「えぇ！でもさ・・・」

のぞくのを断ったがやはりここも相馬が強引に見せようとしてきたので流されて結局はのぞいてしまった

「あ・・・」
中をのぞいてみるとそこには温泉に入っている渚たちや湯に少しだけ足をつけて話している円香達がいた

「ちょっ・・・これは・・！」
「ふふふ、どうだ空すんばらしいだろ！」
「あぁ、えっとなんていうか一応見えるんだけどよく見えないな」
「まぁそれは我慢しろ。だが一応見えるんだ。それだけでも興奮するだろ！！」

確かに興奮しないことはないな・・・ってなに俺はこんなこと思ってるんだ！
でも・・・渚と姉さんがあそこまで成長しているなんてな。

「空、まだまだ見たい気持ちはわかるがそろそろ俺に代われよ！なぁに後でたっぷりまた見せてやるさ」

「いや、もういいよ」

俺はのぞくのをやめて相馬と代わった。

「おぉ！渚ちゃんはいい体してるな！美琴ちゃんと円香ちゃんはまだまだだがこれからに期待だな！」

どうやらこいつはもうやめなさそうので俺は中の温泉でも少し入ってそろそろ出るとするか。

「ふぅ、さっぱりしたぁ」
着替えもさっさと終わらせて俺は温泉から出てきた。だが出てきたのはいいけど誰も外にはいなかった

「みんなまだ入ってるのかな？それにしても相馬のやつまだのぞいているのか・・・」
そうこう考えているうちに女性陣がぞろぞろと出てきた。

「よぅ、だいぶ長く入ってたんだな」
「ごめんね空君。でもちょっと色々あってね～」

姉さんが言った色々ってなんだろ。それに気のせいかみんなが温泉に来た時より不機嫌なような気がする・・・・。

「なぁ水無月なんかあったのか？」
「フフ、すぐにわかるわよ」
すぐにわかるって一体なんなんだ。

「瑞穂そろそろ帰りましょ。お腹空いちゃったし」
「そうだね～。それじゃあ皆帰ろうか～」
女性陣はぞろぞろと帰ろうとしていた。

「えっとまだ相馬のやつ出てきてないんだけど。待ってやらないの

？」
「榎本先輩なんて知りません！それより先輩早く帰りましょ！」
あの美琴が怒ってるなんて・・・。まさかあいつ・・・
「あ、ごめん先帰ってて忘れ物しちゃった」
俺は嫌な予感がしたので急いで中に戻っていった。そして脱衣所で相馬を見つけた。

「おい、相馬大丈夫か！？」
脱衣所には体が赤くなっておりひっかかれた痕や殴られた痕跡があった。
「一体なにが・・・」
「おぉ、その子の友達かい？」

なにがあったかを考えているとすぐそばで着替えてきたおじいさんが話しかけてきた
「はい。こいつに一体なにがあったんですか？」
「その子はあの秘密ののぞきポイントでのぞいておったんじゃが興奮していてつい力が入ってしまったんじゃろうあのボロボロになっておった竹で作られた壁を倒してしまったんじゃ。それで女湯が丸見えになってしもうてのその少年がのぞいていたこともバレてしまってそうなってしまったということじゃ。」

やっぱりのぞきがバレてしまったのか・・・。それにしてもこのおじいさんも秘密ののぞきポイント知ってたのか。

「久しぶりにエエもん見させてもらったわい」
そう言うとおじいさんは脱衣所から出て行った。

「うぅ・・・空・・・」
「相馬、やっと目覚ましたか。大丈夫か？」
「大丈夫じゃない・・・。でも俺は今幸せ・・・」
これだけのダメージを食らっておいといてこんな幸せそうな顔をできるとはな・・・。
「それより早く着替えろよ。さっさと帰るぞ」
「あぁ、もう少し待っててくれ傷が痛くてうまく服を着れなくてな・・・」
「わかったよ。じゃあ外で待ってるからな」
この後なんとか相馬が着替えることができ俺達は家に帰っていった。

家ではみんなが飯を作っており待っていてくれた。
「ほらほら空君早く席に着いて食べようよ！今日は私も一緒に手伝って作ったんだよ」
「へぇ円香って料理できるんだな」
「なによ～その言い方」
「はは、ごめんごめんそれじゃあ食べようかみんな」

「あの～皆さん」
「ん？どうした相馬？」
「俺のところに料理がないんだけども・・・」
相馬のところを見ると料理がひとつもおかれてなかった。

「フフ、何言ってるの相馬に料理がないのは当たり前じゃない」
「だってそれぐらいの罰当然よね～」
やっぱりみんなはのぞきの事で相当怒っているらしい

「空～なんとかしてくれよ～」
「いや、俺に助けを求められてもな・・・」
「だいたいお前だって一緒にのぞいてたじゃないか～・・・」

「えっ！空君それって本当なの！？」

こいつ余計なことを・・・

「え～っとそれは～・・・」
「朝倉君、やっぱりあなたもそういう人だったのですか！」
「空君、見てたの？」

やばい、これはやばいぞ・・・
「いや、相馬を止めようとしたら無理やり見せられて、それで・・・」
「それでも同罪です！」
「うぅ～先輩見てたんだ～」

特に茜先輩がやばいな。
「フフ、でも朝倉なら見られても悪い気はしないわね」
「え？」

この空気の中水無月が意味がわからないことを言い始めた。

「そうだね、空君なら言ってくれたらお姉ちゃんいつでも見せてあげるのに～」
「それはいいんですけど、私小さいから・・・。先輩満足できなかったと思うし・・・」
「まぁでも空君だしね～」

姉さんまでおかしなことを言い始めたな。それに美琴の小さいって・・・。あと円香の俺だしって意味がわかんないぞ・・・。
「けど、空だって言ってもやっぱり恥ずかしいよ～」
渚が言ってるとおり普通はそうだろうな。

「フフ、でもこののぞきのリーダーは間違いなく榎本ね」
「うッ、それは・・・」
「そうです！全ては榎本先輩がいけないんです！」
「そうね、朝倉君は多数決でまだ助けられるけど榎本君はダメね」

これは、助かったのか・・・。
「でも、朝倉君もしっかりと反省してね！今度もしこんなことがあるようなら生徒会長に報告するからね！！」
「はい、気をつけます・・・」
「さてと解決したことだしみんな食べよ～」
「そうですね。ほら、朝倉先輩も食べましょ！この料理は私が作ったんですよ」

なんとかのぞきの話は終わったようだった。そして相馬はそのまま放置されていた。

「ねぇねぇ空君」
「なんだ、円香？」
円香は俺の耳元でなにかを囁き始めた。

「私の裸見た時興奮してくれた？」
「ちょ、お前なに言ってるんだよ！？」
「はは、冗談冗談♪でも少しでも興奮してくれてたら嬉しいな～」
「勘弁してくれよ・・・」

円香の言った事に動揺したが俺は飯を食べることにした。
食べている間は相馬の視線が痛かったが・・・

「さて、食べたことだしあとは寝るだけだな」
「明日も皆で遊びに行くし早く寝た方がいいね」

「でもさ、みんなの寝るとこどうする？俺と姉さんは自分の部屋でいいとして、あと6人は・・・」
「そのことなら大丈夫だよ空君。この時のためにお父さんが使った部屋きれいにしといたから。それに茜ちゃんと円香ちゃんは私の部屋で寝てくれるらしいから」
「あ、そうなんだ。じゃあおじさんの部屋は渚、水無月、美琴が使うとして相馬は俺の部屋かな？」

「フフ、それは危険ね。榎本を朝倉のところに置くとまたなにかやらかすかもしれないし、それにまた強引に朝倉を付き合わせるかも

しれないわよ」

「ヴッ！」

「どうやら図星のようね榎本」

「じゃあ、相馬はどうしようか？」

「ここでいいじゃない。リビングなら広いし。それに外で寝るよりマシよね、榎本？」

「はぃ・・・」

なんか相馬のやつだいぶみんなから危険物扱いされてるな・・・

「それじゃあ俺は部屋に行くとするよ」

「おやすみ～空君」

「俺を置いていくのかー」

途中相馬の声が聞こえてきたような気がしたがきっと気のせいだろう

「今日も大変だった・・・」

いつも通り俺はベッドに倒れ今日のことを思い返していた。

だが思い返していたら俺は温泉でのぞきの光景のことを考えてしまった

「わぁッ！俺はなに考えてるんだよ！？まさかまたあのことを考えているなんて・・・」

「フフ、なに考えてるの？」

「うわぁッ！なんで水無月がここにいるんだよ！？」

「フフ、そんなに驚かなくてもいいじゃない。ただ私は朝倉の様子を見に来たの」

こいつ相変わらず気配がないよな・・・

「別に様子なんか見に来なくてもいいよ・・・」

「そう？それより朝倉は今さっき何考えてたの？なにか独り言してたみたいだったけど？」

「別になにも考えてないよ」

「フフ、そうなの。私はてっきり温泉でのこと考えてると思ったわ」

こいつまさか俺の考えてることわかるのか・・・

「そ、そんなわけないだろ！」

「あら、そうだったの？残念。」

なんとかこの場は凌ぐことができたが水無月はまた余計なことをしでかそうとしていた。

「フフ、本当のこと言ったら少しくらい見せてあげたのに・・・」

「見せるってなにをだよ？」

「フフ、わかってるくせに」

そう言うと水無月は少しずつ服をめくり始めた

「お前、なにやってんだよ！？」

「何って、朝倉が私の全てを見たそうにしてたから服を脱ごうとしてるの」

「いいよ！見なくていいからこれ以上服をめくるな！」

俺は服を脱ごうとしている水無月の手をとってやめさせようとした。

「あら、意外と強引ね」

水無月は力を入れているのかなかなか服から手をはなさなかった。

「空くーん、なに騒いでる・・・」

その時タイミング悪く姉さんが部屋に入ってきた。
「な、なにやってるのよ空君！！」
「いやいや、ちょっと待ってよ！俺はなにもしてないよ！水無月がまたおかしな事をしでかそうとしていて止めようと・・・」
「フフ、まさか朝倉がこんなに大胆だったとはね～。もう少し優しくしてほしかったわ・・・」
こいつ、なに余計なことを・・・！
「空君！！どういうこと！？」
「いや、だから・・・」
いつもの穏やかな姉さんがこんなに怒っていることに俺はびっくりしてしまい思うように言葉が口からでなかった。
「こうなったら・・・」
「こうなったら？」
「今日は空君の部屋で寝ます！」
「えぇーーー！？」
「フフ、なんだか面白い展開になってきたわね・・・」
「いやいや全然面白くなんかないよ！ちょっと、姉さん嘘だよね！？」

「本当だよ！空君ひとりだったら他の女の子のところ行くかもしれないし、だからお姉ちゃんが空君を監視するの！」

そう言うと姉さんは部屋を飛び出て行き半端ない速さで布団を持って部屋に戻ってきた

「ちょっと姉さん本気なの！？」

「当たり前だよ！ほら空君も寝る準備して！」

「でもさ・・・」

姉さんは俺の言うことを聞かずに布団をさっさと敷き始めた。

「フフ・・・、それじゃあ2人ともおやすみなさい・・・」

「お、おい水無月！！」

水無月は俺たち2人を置いてさっさと部屋から出ていった。

「さぁ空君、電気消すよ～」

「あぁ、うん・・・」

結局俺は流されるような形で布団の中へと入った

「はぁ・・・」

電気は消され俺のベッドの横には姉さんが寝ている。そのことを考えるとなぜか眠れなかった。

「あはは、空君と一緒だ」

どうやら姉さんはまだ起きていたようだった

「なんかこうやって空君と同じ部屋で寝るのって久しぶりだね～」

「そうだね。たぶん6年ぶりくらいかな？」

「そうだよ～。私はいつでも空君と一緒に寝ていいのになんで空君は駄目なの？」

「いや、それはさすがに駄目だろ。姉さんも俺ももういい歳なんだから・・・」

「えー、私は全然気にしないのに～」

「それでも駄目だよ」

「う～、空君最近いじわるだよ～。小さい時なんかいつもお姉ちゃんと一緒だったのに・・・」

「いや、そんな小さい頃の事出されても・・・。」

というより子供の頃はどっちかというと姉さんのほうが俺にずっとついて来てたような気がするし・・・

「あ、小さい頃といえば空君がこの家に来てだいぶ経つよね～」

「あぁそうだね。もう少しで１０年ぐらいになるかな？」

「ねぇ空君」

「ん？」

「この家に来る前のこと少しは思い出した？」

「いや、全然・・・」

この家に来る前のこと・・・やっぱりなにも思いだせない。一体なんで俺の６歳以降の記憶がないかが・・・

「そっかぁ。でも私的には空君が記憶を思い出さない方がいいかも」

「え、なんで？」

「だってもし記憶が戻ったりしたら空君が前住んでいた家に戻っちゃうかもしれないし・・・」

前の家か・・・。俺にもあったのかな？

「大丈夫だよ姉さん」

「え？」

「例え記憶が戻っても俺は朝倉空であって朝倉家の・・・朝倉瑞穂の弟だよ。だから勝手にどこか行ったりはしないよ」

「空君・・・」

「それに今はおじさんもこの家に居ないんだしもし姉さんが家にひとりになったりしたら大変だろしね」

「もぉ、大変ってなによ～。」

「はは、ごめん」

「でもそうだよね。空君はもうこの家の人なんだし、お姉ちゃんをひとりになんかしないよね！」

「当たり前だよ。それじゃあ話はここら辺にして早く寝よう」

「う～ん。もう少し空君とお話したかったけど明日も早いししょうがないか・・・。じゃあおやすみ空君」

「うん、おやすみ」

少しした後姉さんの寝息が聞こえてき俺はそれにつられるかのように俺はだんだん眠くなっていつの間にか寝ていた。

俺のゴールデンウィーク

ゴールデンウィーク2日目・・・

「こらっ！いい加減起きろー！」

「うわっ！！」

朝、気持ちよく寝ていたはずなのだが急に大声とともに布団もおもいっきりめくられ俺はたたき起こされるような感じで起こされた。

「やっと、起きたよ・・・。渚ちゃんが言ってた通り空君って朝苦手なんだね」

俺の前にはもうすでに服に着替えている円香居た。

「はは、ごめんごめん。」

「全くお姉ちゃんといい空君といい、ほんと～に世話がかかるんだから」

先輩も朝起きるの苦手なんだ。いいこと聞けたかも。

「まぁでも空君の寝顔見れたから私にとっては役得かな♪」

「え、役得って・・・」

「とりあえず空君早く着替えて下に来てね。もう朝食できてるから」

そう言うと円香は部屋から出て行きパタパタと階段を下りていった。

そして俺もさっさと着替えをしてから下へと行った。

リビングへ行ってみると皆はもう起きていてテーブルには朝食がすでに置かれていた。

「おっそいぞ、空！俺は昨日から何も食ってないから腹が減ってるんだ！」

「それはお前のせいだろ・・・。まぁ待たせてごめん」

「さ～てと空君も来たことだし食べましょうか～。それじゃあ皆さん一緒にいただきま～す」

「「いただきまーす」」

皆で一斉に食べる挨拶をした途端に相馬はガツガツと一気に食べ始めた。よほどあいつはお腹が空いていたんだろう。

「ところで今日は出かけるんだよね？」

飯を食べている途中に俺は皆に今日出かけるところのことを聞いてみた。

「やっぱりボウリングでしょ！」

「私は～、公園でも行ってみんなとゆっくりお弁当でも食べたいな～」

「私は水族館かな」

「朝倉先輩と一緒に買い物したいです！」

「動物園とかいいかも」

「フフ、私は朝倉とならどこでもいいわ」

渚は遊園地、姉さんは公園、円香は水族館、美琴は買い物、茜先輩は動物園、水無月は俺任せ

円香とは一緒に前水族館行ったのにまた、行きたいのか・・・。水無月は水無月で俺任せというよりあいつと一緒に居るとろくでもないことが起きそうだし。

というより今日行く場所はっきり決まってないんじゃん！

「なぁ、朝倉。俺のこと忘れてないか？」
「あ、すまん。忘れてた」
「おい、はっきり言うなよ！」
「ごめん、ごめん。で、相馬はどこに行きたいんだよ？」
「ふっふっふっ、良くぞ聞いてくれたな空。俺が行きたい場所はな、それは・・・」
「で、朝倉何処行くの？」

相馬が立ち上がって何処へ行くか発表しようとした時水無月が横から入ってきた

「おぃ、水無月俺の発表を聞け！」
「うるさいわね。あんたは少しだまってなさい」
「ひどい！」
そう言うと相馬はいじけるように後ろに下がっていった。
まぁ昨日あれだけのことしたんだしな。

「で、朝倉どこ行くの？」

「そう言われてもなぁ」

皆の行きたいところがバラバラだしというより俺は家でゆっくりとしたいんだが・・・。

「こら、空君優柔不断はダメだよ！」

優柔不断って言われてもこんなに意見があったらさすがに決められない。
俺は一体どうすればいいんだろか・・・
「フフ、やはり困ってるようね朝倉」
「そりゃ困るよ。こんだけ意見があったらまとめれないし・・・」
「そんな朝倉にいいところを教えてあげるわ」
「いいところ？」
「少し皆が言ってるカテゴリーと違うけど、この近くに新しくテーマパークができたらしいわよ」
「あ、工事中だったところか。もう完成したんだな」
「ええ。元々ゴールデンウィークに間に合わすように工事してたから。それにそこだと色々な遊ぶものがあっていいかもしれないわよ」
確かに水無月の考えは一理ある。このまま皆の意見をまとめようとしてもうまく結果が出ないままになってしまうかもしれない。だったらたくさん遊べるものがあるテーマパークに行ってみてもいいかもしれない

「よし、だったら皆で新しくできたテーマパークに行こうよ」
「さんせー！」
「じゃあ私はお弁当作らないと・・・」
「瑞穂先輩、食べるところがちゃんとあるのでいらないと思いますけど・・・」
「ん～水族館にもう一度行きたかったけど、テーマパークも面白そうだからいいかな」
「先輩と遊びに行けるならどこでもいいです！」
「なんとか決まってよかった・・・」
「フフ、朝倉私にひとつ貸しができたわね」

水無月が言ったことは聞かなかったことにして俺たちは朝食をさっさと食べた後テーマパークへ行く準備をして３０分後には家を出た。
テーマパークは電車を使って２０分ぐらいのところだ。
昨日あまり寝付けなかったこともあり俺は少しの間だけ眠りに入った。

だけど２０分とは早いものでいつの間にか電車は目的の駅についたようだ。
眠りから覚めた俺はボーッとしてたけど円香に急かされるように電車から下りた

「もうっ！空君寝てばっかりなんだから！」

「ごめん。でも昨日はあんまり寝付けなかったんだよ・・・」

「全く～。テーマパークではしっかりしてよね！」
「わかってる。気を付けるよ・・・」

微妙にむくれている円香に返事をしたが俺はひとつ気になることがあった。

「あのさ、円香。ひとつ聞いていいかな？」

「ん、何かな？」
「いや、いつまで手握ってるのかなと思って・・・」

電車を急かされて降りたときから円香は俺の手を握ったままだった。

「え～だって、空君がまた寝ちゃうかもしれないじゃない」
「さすがに歩きながらは寝ないよ・・・。それに皆に見られたらなに言われるかわからないし・・・」
他の皆は前を歩いていて今はまだ気づいてないけどその内絶対気づくだろう。
「え～別にいいじゃん」
「駄目だって・・・」
円香がぶつぶつ言うなか俺は半ば無理矢理に円香と繋いでいる手を離した。
「ぶ～、空君なんか冷たいよー」
「いや、普通だって。ほら皆に置いていかれるから早く行かないと」
まだ円香がぶつぶつと文句を言ってるので逃げるように皆のもとへと走っていった。

それからしばらく歩いていると目的地のテーマパークが見えてきた。外見から見るとただの遊園地にしか見えないが行く前に見たパンフレットでは中で様々なことができるらしい。
「それにしても、よく水無月が最近テーマパークできたこと知ってたな」
「なにかおかしいかしら？」

「いやだってお前ってこういうの興味なさそうだし・・・」
「フフ・・・そうでもないわよ。それに新しい情報を仕入れるのは私にとっては当たり前のことだし」
本当にこいつについては一番謎だよな・・・。
そんなことを思っているとテーマパーク前に着いた。

「空君、入場料お姉ちゃんが出そうか？」
「大丈夫だよ、姉さん。僕だってお金あるから」
「そっかぁ。じゃあちゃんと入場券買うんだよ～」
「わかってるって」

正直皆の前で姉さんに過保護的な感じでされているのに恥ずかしさがあったのだがなんとか平静を保つことができた。
入場券を買うと受付の人に見せてテーマパークの中へと入っていった。

「うわぁ・・・すごーい！朝倉先輩見てください！いっぱい遊ぶところがありますよ！！」
中に入るとそこにはたくさんの乗り物や遊ぶ場所があり予想していたよりもずっと広かった。
そしてそれを見た美琴はいつも以上にはしゃいでいた。

「ほんとだね。まさかここまで広いとは思ってもなかったよ」
「先輩！まずは何処から行きますか！？私は先輩とならどこでもいいです！」
「そうは言われてもなぁ、これだけ行くところあったら迷ってしまうな・・・」
「んじゃあまた多数決とればいいんじゃねぇのか？今度は俺様も入

れろよ」
確かに相馬の言うとおり多数決をとったほうが早く決まるんだけどまたここに来る前のようにごたごたしそうな気がして多数決をとるのは気が進まなかった

「フフ、お困りのようね朝倉」
「また何か思いついたのか水無月？」
「そうね。思いついたといえば否定できないわね」
「なんか回りくどい言い方だな・・・。で、どうやって決めればいいんだ？」
「まずグッパーをするわ」
「グーパーってあのジャンケンのグーとパー限定のやつか。それで？」
「それでグーパーで分かれて2チームにするわけよ。それでその2チーム別れて行動するってことよ」
「なるほど。それだったら色々と遊べるし口論もないし効率いいかもな」
「フフ、そうね。それでさすがにそのチームずっとそのままもアレだから午前中と午後約3時間ほどで交代ってのはどうかしら？」

3時間ほどで交代。結構時間とるな・・・。
今が9時半ってことは12時半か。そこから皆で昼食とってだいたい1時間。それで1時半から3時間で4時半。帰りは電車とかの時間もあるしここを少し早めに出ないといけないし、ちょうどいい感じの時間かもしれない。

「確かにいい考えだな。よし、それでいこう」
「フフ、これでまた貸しひとつね朝倉」
「皆とりあえず集まって聞いて欲しいことがあるんだけど・・・」

水無月が言ってたことは気にせず僕は今さっき水無月と話し合っていた内容を皆に伝えた

「うん、確かにそれはいい考えね。なんか水無月さんと朝倉君を褒めるのは嫌だけど・・・」

「いい考えですけど、もしジャンケンで負けて朝倉先輩と違うチームに行くのは嫌だなぁ」

「私はどっちでもいいけど空が変な気を起こさないか心配なんだけど・・・」

「私は楽しければいいんだけど空君と一緒にいれば楽しそうだな」

「空君にはお姉ちゃんがついていないといけないよね～」

「俺様はどっちにしてもパーラダーーイス！」

皆色々と言っていたがそこは気にせず早速グーパーをすることにした。

「それじゃ皆やるよ～。グーパーの・・・」

急に掛け声を出しやり始めたので皆焦ってそれぞれ手を出した。

そしてグーパーの結果は・・・

「えっと、グーが俺に渚、円香、姉さん。パーは相馬、水無月、美琴、茜先輩だよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5735l/

アカデミーパレード

2011年10月7日05時19分発行